
ACE (アナザー・センチュリーズ・エピソード) 学園

蒼き星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナザー・センチユリス・エピソード
ACE学園

【Nコード】

N38440

【作者名】

蒼き星

【あらすじ】

日本の某所に存在するある大きな学園。そこは、多民族間の共存を促すために作られた場所だった。主人公の前杉士樹は命の恩人であり、師匠でもある海東大樹から託されたアクエリアスドライバーを使い、波乱万丈な毎日を愉快的仲間たちと共に楽しく過ごしていく。原作キャラの設定変更が大きくなされていたり、独自の設定が加えられたりすることがあります。（例えば、年齢が変更されていたり、原作とは出会いの場面が大きく違っていたり、原作では死亡しているキャラが生きている等）

プロローグ

宇宙には様々な物語がある。

そのいくつかの例を挙げよう。

例えば、機械を使って魔法を制御する者達の物語。

仮面と鎧を身にまとい、世界を守るために戦った者達の物語。

未練を持った者達が死後の世界で神に抗う物語。

過去を求めたあげく世界中に侵略し、非人道的な行いを繰り返す自らの父に魔女と契約して手に入れた王の力をもって反逆する者の物語。

幼い頃に出会った神の世界と悪魔の世界の王女に慕われた少年の物語。

これは、本来交わることのなかった複数の物語が混じり合い、キャ

ラクター達が正史とは違ったり、同じだったりする悩みや出来事を
経て、同じ場所で共に生活し、共存を図り、正史で防ぐことが出来
なかった悲劇や本来起こり得なかった事件に協力して立ち向かって
いったりもするもう一つの物語である。

故に、この物語には正史とは違う葛藤や悩み……、そして幸せがあ
る。

プロローグ（後書き）

自分は説明が苦手なので改めて言います。

これは、あくまで二次創作で、原作とはかなり設定が違う部分があります。（例：リリカルシリーズでは、ヴィヴィオがなのはの養子ではなく『義妹』だったり、アインハルトとヴィヴィオ達の出会いにノーヴェが関係していないなど）

そういうことがあることを念頭に置いてこの小説をお読みください。

当小説の設定集

「キャラ紹介」

名前：前杉まえすぎ 土樹しき

性別：男

年齢：17歳

髪/瞳：黒髪/蒼

所属：ACE学園高等部2年C組

クラス：仮面ライダー（射撃型）

その他：この物語の主人公。幼いころ、海東大樹に命を救われ、戦闘の手ほどきを受けた後、ディエンドライダーの後継機であるアクエリアスドライバーを譲り受け、仮面ライダーとなった。現在は高町家に居候中で、恋人のアインハルトに妹分のヴィヴィオ、愉快的な仲間達と一緒に楽しく学園生活を送っている。海東大樹の影響か年に似合わぬ度胸があつて、アインハルトが自分絡みで修羅場を発生させたりした場合、普通に楽しんでいる事が多い。いちおう魔法（ミッドチルダ式メイン）も使えるが、銃火器による戦闘をメインとしているために攻撃魔法はほとんど習得していない。八神はやてに毒され、R18方面で積極的なアインハルトに対して戸惑ったり、注意したりすることもあるが、本人も毒されてきたのか開き直ったりすることがある。第15話にて地球とは別世界に存在するベールセル王国の貴族の血筋であることが明かされた。

名前：アインハルト・ストラトス

性別：女

年齢：17歳

所属：ACE学園高等部2年C組

クラス：古代ベルカ式魔導師／MS少女

その他：前杉土樹の恋人で、古代ベルカ時代に生きた王の1人である霸王の子孫。自分の感情を表に出すのは苦手だが、土樹の前では比較的素直に甘えたり、割と大胆な行動を取ったりする。土樹に他の女性が抱きついたりすると嫉妬の炎を燃やすが、土樹が自分のことを1番愛してくれていると分かっているため、土樹のことは信頼している。第13話にてアストレイ・グリーンフレームをベースに土樹が再設計した（格当戦に必要な柔軟性と剛性が大きく強化されている）MSを受け取り、MS少女となった。

名前：風凧 レイ

性別：男

年齢：17歳

容姿：ネギまのナギ・スプリングフィールド

性格：自由奔放

身長：167?

所属：ACE学園高等部2年C組

クラス：魔法剣士

一人称：俺

他人称：名前呼び

魔力：SS+

術式：ネギま式&近代ベルカ式

好きなもの：強者との戦闘、ヴィヴィオ、クラスの仲間

嫌いなもの：威張り腐った奴、理不尽な暴力、親衛隊連中

「ACE学園について」

多民族共存を促すために作られた学校で、一般人以外にも様々な能力者や種族が通っている。常識では考えられないたくさんの施設や環境、仕事を紹介するギルド等もある。

「登場人物と出典元」

魔法少女リリカルなのはVivid

- 1 . アインハルト・ストラトス
- 2 . 高町ヴィヴィオ
- 3 . リオ・ウエズリー
- 4 . コロナ・ティミル
- 5 . 高町なのは
- 6 . 八神はやて
- 7 . ルーテシア・アルピーノ
- 8 . キャロル・ルシエ
- 9 . フリードリヒ
- 10 . シヤマル
- 11 . イクスヴェリア
- 12 . オリヴィエ・ゼーゲブレヒト（劇場版）
- 13 . クラウス・G・S・イングヴァルト（劇場版）
- 11 . シグナム

魔法少女リリカルなのはStrikers

- 1 . ジェイル・スカリエツィ

- 2 高町恭也
- 3 高町士郎
- 4 高町美由紀
- 5 高町桃子
- 6 ユーノ・スクライア
- 7 ウーノ

Angel Beats!

- 1 音無結弦
- 2 大山
- 3 高松
- 4 野田
- 5 日向秀樹
- 6 直井文人
- 7 立華奏
- 8 仲村ゆり
- 9 遊佐
- 10 松下
- 11 TK

SHUFFLE!

- 1 土見稟
- 2 時雨亜沙
- 3 緑葉樹
- 4 麻弓「タイム
- 5 芙蓉楓
- 6 リシアンサス
- 7 カレハ
- 8 神王ユーストマ

9 ・魔王フォーベシイ

仮面ライダーカブト

- 1 ・天道総司
- 2 ・天道樹花
- 3 ・加賀美新

コードギアス

- 1 ・ルルーシュ・ランペルージ
- 2 ・ナナリー・ランペルージ
- 3 ・枢木スザク
- 4 ・セシル・クルーミー
- 5 ・シャーリー・フェネット
- 6 ・紅月カレン
- 7 ・ジノ・ヴァインベルグ

仮面ライダーディケイド

- 1 ・海東大樹
- 2 ・アポロガイスト（劇場版）

仮面ライダー555

- 1 ・海堂直也

仮面ライダーキバ

- 1 ・大森

仮面ライダー龍騎

- 1 ・城戸真司
- 2 ・秋山蓮
- 3 ・佐野満

これはゾンビですか？

- 1 ・相川歩
- 2 ・ユークリウッド・ヘルサイズ
- 3 ・トモノリ（本名：メイルシュトロームだが、学園では吉田友紀と名乗っている）

鋼の錬金術師

- 1 ・ロイ・マスタング
- 2 ・リン・ヤオ
- 3 ・リザ・ホークアイ

DOG DAYS

- 1 ・シンク・イズミ
- 2 ・エクレール・マルティノツジ
- 3 ・フランボワーズ・シャルレー
- 4 ・ミルヒオーレ・F・ビスコッティ
- 5 ・ロラン・マルティノツジ
- 6 ・ユキカゼ・パネトーネ

A C E 学園オリジナル

- 1 . 前杉土樹

投稿されたオリキャラ

- 1 . 風凧レイ

それのおとしもの（天使と仮面騎士の物語）（二次創作）

- 1 . イカロス

不神死暗の斬滅記（二次創作）

- 1 . 朝凧イルスイ

学園戦記 無限学園！！（二次創作）

- 1 . 天堂恭介
- 2 . 千堂由美

突撃！ミッドチルド学園（二次創作）

- 1 . グラハム・エーカー

第1話『終焉の後継者と古代ベルカの戦姫』（前書き）

皆さん、お待たせしました。ようやく第1話を上げられました。こ
ゆっくり楽しんでください。

第1話 『終焉の後継者と古代ベルカの戦姫』

日本の某所に存在する波乱万丈だが、基本的に平和な学園。

そこで授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。

「よし！ これで本日の授業は終わりだ！！」

2-Cの担任である紅薔薇撫子べにばらなでしこが授業の終わりを改めて告げ、その後のホームルームもすんなりと終わった。

生徒達がまばらに退出し始めた頃、背伸びをした主人公の前杉土樹つちみりんに同じクラスの土見稟つちみりんがあくびをしながら話しかけた。

「ふあく。やっと授業が終わったな」

「そうだな」

土樹は背伸びをしながら答える。

「授業も終わったし、喫茶店にでも行かないか？」

「じゃあ、フローラに行かないか？」

「それでいいよ。音無はどうなんだ？一緒にフローラに行かないか？」

土樹は既に教室を出ようとしていた音無結弦おとなしゆじゆんを誘う。

「悪いな、今日はゆりから死んだ世界戦線の集まりに来てって言われているんだ」

音無は土樹の誘いを断って慌てて教室から出ていく。

「死んだ世界戦線の集まりか。今度は何をやる気なんだ、あいつら？」

「俺に分かるわけないだろ、土樹」

2人は音無を見送った後、教室を出ようとする。

「さて、フローラに行く『ちょっと待ったああー！ー！』」

土樹の台詞を遮るように教室の扉が乱暴に開かれ、1人の少女が乱入してくる。

「稟ちゃんいる!?!」

「何ですか、亜沙先輩?」

稟の恋人達……通称土見ラバーズの一員である常日頃から元気が売りの時雨亜沙しぐれあさに土樹は呆れながらも要件を尋ねる。

「えっとね、料理部で作っていた新作のケーキが出来たから稟ちゃんに試食してもらおうと思って……」

亜沙は顔を赤らめてもじもじしながら用件を話す。

「というわけでレッツゴー!」

「ちょっと、亜沙さん!? 俺には先約が『答えは聞いてない』」

稟の叫びは虚しくも亜沙には届かず、強制連行されていった。

「今日は異世界にでも行って狩りをするか」

1人寂しく教室を出ようとした時、碧銀の長髪を持つ少女……土樹の恋人であるアインハルトが土樹に近づいて喋りかけた。

「土樹、それなら私と歩きませんか？」

土樹は少し考えた後、恋人の誘いを受けることにした。

「たまにはそれも良いな。分かったよ、アインハルト」

土樹はそう言うと、アインハルトと教室を出た。

高等部の校舎を出た後、2人は町の外れを歩き、河原にある公園のベンチで休憩していた。

「当たり前のように穏やかで静かな平和がある。今は本当に幸せですね」

まるで戦争が終わったばかりであるかのように平和を噛みしめるアインハルト。

「そうだな」

土樹が答えた後、アインハルトは土樹の左腕に抱き着いた。

「アインハルト……」

「今も夢に見るんです。遠い昔、私の先祖が戦い抜いた古代ベルカ時代の戦争のことを……彼の苦悩を。だから、この平和に戸惑うこともあるんです」

2人の間に沈黙が流れた。

少しした後、土樹はその沈黙を破った。

「良いんじゃないか、それで？」

土樹はアインハルトの悩みを否定せずに肯定した。

「たとえそれが遠い先祖の記憶であったとしてもお前は戦争がどれだけ凄惨なものであるかを知っている。同時に、それは平和の大切さを教えてくれるのだから」

「土樹……」

「ま、どんなものも使いようってことさ」

土樹はそう言って話を締めくくる。

(アインハルトと昔話をしたらあの人と初めて会った時を思い出すな…)

土樹は空を見上げ、遠い過去に思いをはせる。

7年前、少年は住んでいたところが火事になり、その影響で崩れた建造物の瓦礫の下敷きになって動くことができない状況だった。

(俺、こんなところで死ぬのかな…)

少年は物心着いた時から両親に厳しい教育されており、子供らしく過ごした時は皆無に等しかった。

故に感情を余り持たず、生への執着も薄かった。

（奴らの人形として生き続けるぐらいなら死んだ方がましだな）

少年は死を受け入れ、目をつぶった。

その時、鈍器のようなものが落ちる音がした。

少年が目を開けると目の前には銃口が2つ着いた、深い蒼で彩られた銃があつた。

それから間もなくして1人の青年がやってきた。

「やれやれ。どうやらその銃は君を選んだみたいだね。ついでだから助けてあげるよ」

その出会いは。少年の口調が“俺”から“僕”へと変わり、少年が今まで持っていなかった生きる希望を持つきっかけになった。

「きつ！ 土樹、起きていますか!？」

「!?!？」

土樹は昔のことを思い出している内にアインハルトにもたれかかって寝ていたようだ。

土樹はアインハルトの呼び掛けに気がつくとすぐに起きた。

「悪い。少し昔のことを思い出している内に寝てしまっていたみたいだ」

「別に構いませんよ、土樹。そんなに眠たいのなら私の膝枕で寝ませんか？」

アインハルトは膝をポンポンと叩き、「遠慮しないでください」と視線で訴えかけてくる。

「お言葉に甘えるよ」

土樹はアインハルトに負担がかからないようにゆっくりと自分の頭をアインハルトの膝の上に降ろし、目を閉じる。

「どうですか？」

「気持ち良いよ」

土樹はそう答えるとすぐに寝息を立て始めた。

アインハルトは土樹の顔に手を添えて優しい表情でその寝顔を見つめる。

「良い寝顔ですね」

「相変わらず仲が良いね、お2人さん」

背後から聞こえてきた声に反応してアインハルトとそれに続くように眠っていた土樹は飛び起きて後ろに振り返る。

そこには、右手を銃の形にして何かを狙い撃つようなポーズを取った青年がいた。

「くんばんは」

「大樹さん、どうしてここに!？」

「君を探していた妹分に無理矢理手伝わされたのさ」

海東大樹かいたつだいぎは両手を上げてやれやれと呆れたように答える。

「あーっ! やっと見つけたよ、土樹!」

高町たかまちヴィヴィオは大声を上げながら遠くから走ってきて土樹達に近寄る。

「もう！ 何処行つてたの!？」

「学校をアインハルトと一緒に出た後、そこら辺をぶらぶらしてこの河原に来た」

ぶんすか怒るヴィヴィオに対し土樹は普通に答える。

そんな2人を置いてアインハルトは自身の左腕にある時計を見る。

「あの、そろそろ帰りませんか？ 時間も遅いですし」

アインハルトに言われて時計を見た2人も「あ」と見事にハモる。

「じゃあ、僕はそろそろおいとまさせてもらつたよ」

大樹はそう言つと3人から手を振りながら離れていった。

「僕達も帰ろうか」

「「「うん」そうですね」「

3人はそれぞれの家へと帰っていった。

第1話『終焉の後継者と古代ベルカの戦姫』（後書き）

土樹「やっと1話が上がったな」

アインハルト「この作者は他の作者に比べると遅筆ですね。他の作者はもっと速いのに」

作者「悪かったな！自分はこれが限界なんだ！！」

土樹「読者の皆さん、まだまだ未熟な作者ですが、これからもよろしく願います」

第2話『シスコン戦争』

「ナナリーの方が可愛いに決まっているだろ！ この馬鹿が！！」

「何を言っている！？ 樹花の方が数倍可愛い！！！」

のっけから高等部の校舎の廊下で口げんかして注目を浴びている高等部2年のルルーシュ・ランペルージと天道総司。

2人が口に出しているのは明らかに女の名前だが、恋人ではない。

「ナナリーがこの世界で1番可愛い“妹”なんだよ！ 何故分からないんだ、総司！！！」

そう、たった今ルルーシュが口走った通り、恋人ではなく妹である。

2人は妹至上主義なシスコンなのである。

余談だが、天道の方は血が繋がっていない。

妹のことが話題に上がるといつもこうなる2人をそれぞれの親友である枢木スザク（かきみあつた）と加賀美新（かがみあらた）は苦笑いを浮かべて見ている。

周囲にはルルーシュと天道の喧嘩を見物している一般生徒が多く、スザク達の近くにも2人いた。

この小説の主人公である土樹とヒロインのアインハルトである。

土樹はため息をつくつつぶやいた。

「どうしてこうなったんだ…？」

土樹の呟きが聞こえたスザクと加賀美はその問いに答えた。

「事の発端は30分ほど前なんだ。最初は普通に4人で仲良く話していたんだけど、僕がナナリーの様子をルルーシュに尋ねてからだんだん雰囲気が悪くなっていった…」

「知つての通り、2人は負けず嫌いだからな」

「それで、現在の状況になったわけですね」

スザクと加賀美の説明にアインハルトは納得し、頷く。

外野が話している内にルルーシュと天道の喧嘩はますますヒートアップしていった。

「口で言っても分からないようだな、総司！　こうなったら力づくでも分かせてやる！」

「ほう、やれるものならやってみろ！」

天道は腰に赤いベルトを巻き、カブト虫を模して作られた赤いカブトゼクターを右手に持つ。

ルルーシュの周りには黒い歪みが生まれてきている。

「ちょっと、2人共！　こんなところで戦うつもり！？」

見かねたスザクが2人を止めようとするが、完全に無視されている。

一触即発の空気が流れる中、それでも土樹達は普通に見ている。

むしろ、土樹はアインハルトと手をつないで甘い空気を周囲に放出しながらわくわくしている。

ACE学園ではこのような喧嘩は日常茶飯事なため、風紀委員とその関係者を除いてほとんどの人が危機意識を持っていない。

『変身！』

H E N S H I N

天道はカブトゼクターをベルトのバックルに装着すると銀色の分厚い鎧に包まれ、仮面ライダーカブト・マスクドフォームに変身する。

ルルーシュも全身黒づくめのマスクとマント、強化装甲服を纏って魔王ゼロへと変身する。

変身した天道はいきなり「くたばれ!」と言わんばかりにゼロにハイキックを放つ。

「いきなりですね」

「妹のことになると相変わらず怒りっぱいな、あの2人」

アインハルトと土樹が2人仲良く観戦している中、ゼロはカブトのハイキックを避けると右手から紋様が描かれたビームを天道に向かって放つ。

天道はそれを難なく避けるが、

「ん?」

流れ弾を食らった一般生徒の野田が急に意識を失って床に倒れる。

「野田君、しっかり!」

「すぐに保健室へ!」

野田は一緒にいた大山と高松によって速やかに担架に乗せられ、運ばれていった。

「ルルーシユ、一般生徒を『キャストオフ』えっ!?」 CAST
OFF

スザクの台詞を遮るようにカブトはカブトゼクターを操作して装甲をパージした。

「ごっつ!」

「がはっ!」

散弾の如く放たれた装甲で次々と辺りの一般生徒や廊下、その他学校の備品などが犠牲になっていく。

話の途中で不意を突かれたスザク、反射神経がそれほどでもない加賀美は装甲が直撃して床に倒れる。

土樹とアインハルトはとっさに近くの柱を盾にしたので無事だ。装甲の嵐が終わった頃、そこにいたのは赤い細身のライダーだった。

CHANGE BEETLE

「大丈夫か、アインハルト?」

「これぐらいどうってことないです」

ゼロとカブトはそのまま割れたガラス窓から外に飛び降りて撃ち合
いながらグラウンドへと走っていった。

「あつちに行つたぞ！」

「追えー！」

生き残っている野次馬たちはゼロ達を追って、急いで階段を降りて
グラウンドへと駆けていった。

ちなみに、スザク達はほつたらかしである。

「お前、なかなかやるな」

「そつちこそ」

ぶつかり合ったゼロとカブトは若干怒りのボルテージが下がってき
ているようだった。

周りは被害にあって倒れている生徒の小山があった。

それでもまだ生き残っている数多くの生徒が遠慮なしにビームと爆発が飛び交う2人の戦いを面白半分で見物している。

土樹が周りを見ると、賭け事をしている生徒もいた。

「まだいけるな、ルルーシュ？」

「フツ、愚問だな」

2人は何故戦いを始めたのが完全に忘れ、けんかに没頭し始めていた。

「土樹、そろそろ止めた方がよくないですか？」

デコボコになり、穴が開いているグラウンドに生徒の小山を見てさすがにそろそろ止めた方がいいと思ったのか、アインハルトが土樹に提案する。

「そうだな。じゃあ、あいつらに止めてもらおうわ」

土樹は携帯を取り出してどこかにメールを送った。

数分後、ルルーシュの携帯が鳴り、ルルーシュは電話に出た。

「もしもし」

『お兄様、また天道さんと喧嘩しているんですか！？ しかも、周りに大被害をもたらしているそうですね！？』

ルルーシュに電話を掛けたのは、彼の妹であるナナリーだった。

「ナ、ナナリー。何故お前が『そんなお兄様は嫌いです！ しばらく話しかけないください！』 ナ、ナナリー！ ナナリー！！」

ルルーシュに遅れて天道の方にも電話がかかった。

二言三言話した彼は仮面越しでも分かる位に慌てていた。

「樹花！ 嘘だと言ってくれ！！ 頼む！！」

2人は愛する妹にかけられた言葉でパニックになり、もはや喧嘩どころではなかった。

2人の様子を見ている土樹は笑みを浮かべていた。

「帰ろうか、アインハルト。後は、学園の教師とかがなんとかしてくれるだろ」

「2人の間に割って入って止めるのが私が抱いている主人公のイメージなんです…」

「それだけが全てじゃないよ。それに、これが2人を止める1番良い方法なんだから」

2人は騒ぐ集団を後にして帰路に着いた。

この後、グラウンドに駆けつけた紅薔薇撫子にルルーシュと天道が説教されたのは言うまでもない。

第2話『シスコン戦争』（後書き）

「（STS風）次回予告」

士樹「放課後、僕はクラスメイトと一緒に死んだ世界戦線に遊びに行っていた」

アインハルト「そこで私達はいつも通りの平和な日常を過ごしていた……はずだった」

士樹「突如として現れた脅威。僕達はそれにどうやって立ち向かっていくのか？」

士樹、アインハルト「次回、ACE学園第3話『クッキング・ハザード』テイクオフ!!」

第3話『クッキングガザード/Aの降臨』

仲村ゆりが率いる死んだ世界戦線。

その部室ともいうべき場所では、皆が思い思いに遊んでいた。

「ほう。貴様、なかなかやるな」

「あなたも結構うまいわね」

複数あるテーブルの1つでは、生徒会と兼任している直井文人なおい あやとと同じく生徒会所属だが、戦線には属していない立華奏たちばなかなでがオセロをしていた。

「しかえしマスに止まったからレイに10万請求するわ」

「お前、それがクラスメイトに対してやることか…」

「あはは、土樹は昔からえげつないところあるよね」

土樹は同級生のアインハルトに風凧レイ、同じ家に住んでいる中等部2年のヴィヴィオと人生ゲームをやっていた。

「次は、私の番ですね」

アインハルトがルーレットを回して駒を進める。

アインハルトの駒が止まった場所は、先ほど土樹の駒が止まったし
かえしマスだった。

「私は、かえしマスに止まったので10万を土樹に請求します」

「でも、この場合は、アインハルトさんが土樹に追突してるから、
実際に払う金額は8万だね」

「せっかく手に入れたのに…」

土樹は名残惜しそうに8万をアインハルトに手渡す。

「次は、俺のターンだな」

レイがルーレットを回そうとした時、部屋の扉が静かに開かれた。

そこから死んだ世界戦線の最古参である日向秀樹が力なく入ってきた。

「あれ？ 日向君、どうしたの？」

心配した大山が近づいた瞬間、日向は突然白目をむいて大山に襲い掛かった。

「うわああああ!!!!」

「大山！」

藤巻が叫ぶが、大山は日向に組み伏せられてしまった。

「日向、何をしているんだ!？」

音無が背後から日向に取り付いて大山から引き離す。

「大山、無事か!？」

藤巻が大山に駆け寄ってしゃがみ、大山の様子を確認する。

大山は藤巻には返事をせず、静かに立ち上がった。

その目は、日向と同じように白目をむいていた。

「大山!!!!」

藤巻に襲い掛かるうとしていた大山の頭部に青い光弾が直撃し、昏倒させる。

ほぼ同じタイミングで音無に抑えられていた日向にも魔力矢が直撃し、意識を失わせた。

音無と藤巻は、2つの閃光が飛来してきた方向を見た。

そこには、アクエリアスドライバーを構えた土樹とレイがいた。

「藤巻、大丈夫か？」

「すまねえな、土樹」

「復活して襲われたら大変なことになったら大変だわ。松下君、TK、2人を縛ってくれる？」

「分かった、ゆりっぺ」

「OK」

松下とTKがゆりの命令でロープを持って日向達に近づいていく。

「2人がいきなり襲い掛かってくるなんて…、いったい何があったの？」

その時、警報が鳴り響いた。

『全ての学校関係者に伝えます。現在、高等部校舎内を中心として次々と人々が狂暴化していつてます。発生源は食ど』

放送は、何かが暴れるような音と共に中断された。

「放送室もやられたみたいですね」

「そのようね」

アインハルトと奏が部屋にいたみんなに事実を認識させる。

「ゆりっぺ、いったいどうすれば良いんだ？」

第2話でこの小説が始まって以来の最速で退場した野田が、リーダーのゆりに解決案を求めめる。

土樹は対策を考え続けていた。

(ルルーシュの「森羅万象を無に還すギアス」でゾンビを片っ端か

ら元に戻すのは…、いや、さっきの放送を聞く限りとてもあいつ1人で捌ききれぬ数とは思えない。だとすれば、)

土樹は自分の考えが実行できるかどうか確かめるため、ゆりの側にいる女の子に声をかけた。

「遊佐、地下にある科学研究ギルドへのルートは生きているか？」

「今のところ大丈夫です」

「科学研究ギルド…、そういうことね!!」

遊佐は淡々と状況を伝え、ゆりは土樹が何を考えているのか分かったようだ。

「科学研究ギルドの科学者にワクチンを用意してもらって、ゾンビ化した人々を元に戻すのね？」

「そうだ」

「事故現場である食堂も押さえるべきです。編成はどうしますか？」

高松が新たに案を出し、必要事項を述べる。

「そうね。食堂を制圧するA班はレイ君にヴィヴィオさん、科学探究ギルドに行くB班は土樹君にアインハルトで頼むわ。残りは、一般人の救助よ。異論はある？」

皆は声に出さず、頷いて肯定する。

「それじゃあ、オペレーション・スタート！」

後に「クッキングハザード」と呼ばれるゾンビ発生事件。

その解決に少年達が動き出した。

ギルド連絡通路B2。

まるでゲームに出てくるダンジョンのようなそこを土樹達は順調に進んでいた。

「この辺りは、まだ大丈夫みたいだな」

「油断は禁物ですよ」

「分かってるよ、アインハルト」

状況が状況なので土樹とアインハルトは辺りを警戒しながら進む。

その時、何かの足音が聞こえてきた。

2人は互いに背中を合わせて臨戦態勢に入る。

迫る足音と共に横の通路から出てきたのは、大学の海棠直也が変身するスネークオルフェノク、音楽担当の教師が変身するフロッグファンガイアだった。

2人は、土樹達の姿を見るといきなり襲いかかってきた。

「ちいっ！ 例の病原菌は怪人にも効果があるのかよ！」

迫りくる怪人に対抗するため、土樹は1枚のカードを取り出してアケリアスドライバーに挿入し、銃身をスライドさせた。

K A M E N R I D E

土樹は銃口を正面にいるフロッグファンガイアに向けながら引き金を引く。

「変身！」

AQUARIUS

銃口から出現した複数のシルエットは土樹と重なり、その姿を変える。

胸元と両肩にある蒼いバーコード状の装甲にこれまたバーコードを差し込んだかのような特徴的な水色の複眼を持つ頭部、接近戦を考慮して動きを阻害しない程度に装甲を付けられた腕部を持つ仮面の銃士。

それが、土樹が変身する仮面ライダーアクエリアスの姿である。

「武装形態」

アインハルトも陣羽織を彷彿とさせる騎士甲冑を身にまとう。

変身を完了した土樹はふるっぐファンガイアに銃を向け、アインハルトはスネークオルフェノクに殴りかかった。

仮面ライダーアクエリアスについて

外観：全体的なデザインは直系であるデイエンドを踏襲している。デイエンドにおいてシアン色だった部分が蒼くなっている。デイエンドに比べて頭部のバーコードが小型化されており、ライダーの特徴とも言える複眼（水色）が装備されている。両肩及び胸部のバーコード状装甲はそのままだが、腕部の装甲が若干厚くなっている。詳細：海東大樹が様々な世界を旅している途中に手に入れたD（デイケイド、デイエンドを表すD）2シリーズのライダーシステム。デイエンドをベースに全体的な能力の向上が測られており、本体であるアクエリアスドライバーもカードなしで様々な種類の弾（通常マシンガン、ショットガン）を敵によって撃ち分けることが可能になっている他、ミッドチルダ式魔法などの術式（スタン、貫通属性の付加程度）を入れることでより多彩な状況に対応できるようになっているなど、汎用性もある程度強化されている。デイエンドと同じように単独での世界間移動機能がある。インビジブルやブラストなどのアタックライド、ファイナルアタックライドはデイエンドに搭載されている物を強化した物である。他のライダーの能力や必殺技を行使することも出来る。原作デイケイドで土のデイケイドライダーがアポロガイストに吹き飛ばされたり、大樹のデイエンドライダーが外道衆に奪われたりした経験から遠距離から召喚出来るようになっていて、メインの変身者（または資格者）の命令に最優先で従うようになっていて。D2シリーズは他にもデイケイドタイプが確認されているが、それは既に海東大樹によって別の人物に譲渡されている。

「アクエリアスの使用カード」

カメンライド（または、その他の召喚）カード

- 1 ・仮面ライダーアクエリアス（オリジナル）
- 2 ・グノーシス（蒼穹のファフナー）
- 3 ・仮面ライダーシード（魔法少女リリカルなのは〜ヘタレ転生者は仮面ライダー？〜）

- 4 ・仮面ライダーバース（仮面ライダーオース）
- 5 ・マークフュンフ（蒼穹のファフナー）
- 6 ・仮面ライダークウガ（仮面ライダークウガ）
- 7 ・仮面ライダーアギト（仮面ライダーアギト）
- 8 ・ライオトルーパー（仮面ライダー555）

アタックライドカード

- 1 ・ブラスト
- 2 ・クロックアップ
- 3 ・クロスアタック
- 4 ・イリユージョン

ファイナルカメンライドカード

- 1 ・仮面ライダーアクエリアス・ゼロフォーム

ファイナルアタックライドカード

- 1 ・ディメンションシユート？（アクエリアス）
- 2 ・ライダーシユーティング（ドレイク）
- 3 ・アクエリアス・ラグナロク（アクエリアス・ゼロ）
- 4 ・エンドオブワールド（ゾルダ）

「アクエリアス・ゼロフォームについて」

名前：アクエリアス ゼロフォーム

外観：白銀の翼と深海の如き深く黒い蒼

説明：前杉士樹がアクエリアスとして過ごしていく中で身につけていった精神と力をアクエリアスに反映させた状態で、高度な未来予測を可能とする（ただし、負担が大きいために長時間続けて使用することは不可能）。翼は飛行能力を有しているだけでなくシールドとしても機能する。強化変身に伴い、他のライダーの力を使わずにFINAL ATTACK RIDEを連続使用できる様になったり、ハイパークロックアップなど他のライダー最強形態のアタックライドが行使可能になっている。

使用武器：アクエリアスバスター

説明：アクエリアスの最強形態「ゼロフォーム」の専用武器。変身すると、自動的にアクエリアスドライバーが変化する。また、コピーを召喚して2丁同時に使用することができる。

スペック：

1．バスターモード アクエリアスバスターの基本形態。形状は、大型のライフルであり、アクエリアスドライバーとは比べ物にならない威力のエネルギー弾を発射する。

2．マシンガンモード アクエリアスバスターの銃身を折りたたんだ状態。取り回しと速射能力が向上しているが、単発での威力は低下している。また、トンファーとして使用することも可能で、近接戦闘用のビームサーベルも展開できる。

必殺技：

1．アクエリアス・ラグナロク バスターモードのアクエリアスバスターを合体させて放つ巨大な光の奔流。

「専用バイクについて」

名前：アクエリアスチェイサー

外観：（通常モード）基本カラーの蒼に黒色のラインが走っている。
（サブマリンモード）タイヤが水平に倒れ、ゴムボートを連想させるパーツが下部に付いている。

武装：内蔵式ガトリングガン、ミサイルランチャー

詳細：マシンデイクイダーのデータを元に開発されたバイク。並行世界に存在するライダー関係の技術スタッフ達から誕生日プレゼントとして土樹に送られた。土樹の資質に合わせて射撃能力に重点を置いて制作され、その火力はゲイズチェイサーを大きく上回るが、その分重量がある為に近接性能では劣る。また、水中に対応するため、サブマリンモードへの変形機構も備わっている。

第4話『クッキングガード/襲撃のこ』(前書き)

ふう、修正中に間違っ
て消してしまいましたが、
なんとか復元できました。
これからは気を付けます。

第4話『クッキングハザード/襲撃のC』

凶暴化しているフロッグファンガイアはアクエリアスに接近して力任せに右腕で殴りかかる。アクエリアスはフロッグファンガイアの攻撃を左腕で受け流し、間髪入れずにアクエリアスドライバーをマシガンモードにして接射する。フロッグファンガイアはその攻撃に後ずさり倒れるが、すぐに起き上がって今にもアクエリアスに向かおうとしている。

「ちいっ！ しぶといな！」

アインハルトもスネークオルフェノクによる殴る蹴るの攻撃を軽々とかわし、懐に入り込む。

「霸王断空拳」

アインハルトは必殺技とも言うべき攻撃をスネークオルフェノクに叩きこむ。スネークオルフェノクは仰向けに倒れるが、まだ起き上がるうとしている。アインハルトは1度スネークオルフェノクとバツクステップで距離を取り、土樹と背中合わせになる。

「殺傷設定で行きたい所なんです…」

「いちおう同じ学園の仲間だからそれは出来ない。しかも、」

2人が通路を見渡すと、戦闘の音に反応したのかたくさんゾンビ化した人達が集まってきていた。その中には、怪人の姿も結構いることが確認出来た。

「かなりやばいな、これは」

「どうせこういうことになるんだったらさっさと土樹の子供を産みたかったです……」

アインハルトは顔を赤らめてとんでもないことをカミングアウトする。

「アインハルト、ここはノクターンズノベルじゃない。全年齢対応のサイトで、小学生も来るんだよ」

まんざらではないが、土樹は「空気を読んでくれ」と必死に視線で訴えかける。

「なら、ここから先はそこで描写してもらいましょう」

アインハルトは真顔で発言して土樹を押し倒し、自分の服に手をかける。

「アインハルトさん、こんなことをしている場合じゃないと思うんですが」

「今さら何を恥ずかしがっているんですか、土樹。既に何度もそういうことをしているじゃないですか」

「TPOをわきまえろって言ってるんだよ!!」

土樹はたまらず叫ぶ。その間にもゾンビ達は2人に近づくが、

FINAL VENT

電子音と共に現れた2台のバイクによってまとめて吹き飛ばされた。ゾンビを吹き飛ばしたバイクは2人の前に止まり、蝙蝠と龍に変形した。

「大丈夫か、2人共？」

「全く、世話が焼ける奴だ」

「真司！ 蓮！」

「ちっ」

人が来たのでアインハルトは舌打ちしながら土樹から離れ、2人は起き上がった。

窮地？に陥っていた土樹とアインハルトを救ったのは、城戸真司が変身する仮面ライダー龍騎サバイブと秋山蓮が変身する仮面ライダーナイトサバイブだった。

「2人共、どうしてここに？」

「ここに来る目的なんて1つしかないだろ」

龍騎Sの台詞からすると、どうやら2人も土樹達と同じく科学研究ギルドを目指しているようだ。

「さっきの戦闘でこの通路も危険になっている。ミラーワールドを通っていくぞ」

「分かったよ、蓮」

ナイトSと龍騎Sは近くの水たまりからミラーワールドに入っていた。

「行くよ、アインハルト」

「はい」

アクエリアスは自由にミラーワールドを出入り出来ないアインハルトと手をつないでミラーワールドに入った。

「土樹さん達の反応ロスト。どうやら城戸さん達とミラーワールドに入ったようです」

「そう」

死んだ世界戦線本部でオペレーター席に座っていた遊佐からの報告をリーダー用の大きい机でゆりは聞く。遊佐が報告を終えた時、ゆりの通信機に着信が入った。

「どうした？」

『こちら、レイ。この事件の原因が分かったぞ！』

「なんですってー!?!」

ゆりは机に乗り出し、大声で叫ぶ。

『生存者の話によると、学園の教師2名が食堂で料理を振る舞って
いたらしい』

「それで…」

『その料理を振る舞った人が技術のセシル先生とシャル校医らしい』

「なんか結末が読めてきたわ」

技術担当教師のセシル・クルーミ と保健室勤務のシャルの名を
聞いた途端ゆりが呆れ顔になる。

『そのまさかだよ、ゆりさん。どうもシャルさん達の料理がこの
事件の原因みたいなんだよ』

レイと一緒にいたヴィヴィオが答えを告げる。それを聞いたゆりが
頭を抱えた。

「バイオハザードを起こす料理って…、いったいどんなものを作っ
たのよ」

『同感だよ、ゆりさん』

『ある意味才能だな』

「これがワクチンだ、土樹君」

「ありがとうございます、ジェイル先生」

一方、ミラーワールドを経由したアクエリアス達は科学研究ギルドでジェイル・スカリエッティからワクチンを受け取っていた。

「これでは屋上の散布装置にワクチンを入れるだけだな」

龍騎はガッツポーズを取っている。

「それならギルドにある転送装置を使いたまえ。あれならまだ無事だ」

「助かります、ジェイル先生」

アインハルトが礼を言い、一同は転送装置の中に入っていく。それを確認したジェイルはコンピュータを操作していく。

「君達にこの学園の未来を託すよ」

ジェイルが最後に1つのキーを押すと、アクエリアス達は屋上へと転送されていった。

【ACE学園高等部屋上】

「ドアを開けるぞ」

皆がこの扉の先にいるであろう存在に備えて武器を構える。それを確認したナイトSがドアを開けた。そこには、大量のゾンビがいた。

S
W
O
R
D
V
E
N
T

S
W
O
R
D
V
E
N
T

ナイトSと龍騎Sは乱戦に備えて剣を装備した。アクエリアスは突

破口を開くべくカードを1枚取り出して銃に装填し、スライドさせた。

ATTACK RIDE: BLAST

アクエリアスドライバーから広範囲に放たれた追尾性があるエネルギー弾は1つ残らずゾンビに着弾し、蹴散らした。

「行くぞ！」

それを皮切りにして龍騎Sが先陣を切る。皆もそれに続き、ゾンビを薙ぎ倒しながら進んでいく。

「状況が状況だ。出し惜しみしている状況ではないな」

アクエリアスはカードを1枚銃に装填し、スライドさせた。

FAFNER RIDE: GNORRIS

アクエリアスドライバーから無数のシルエットが生まれ、それらがグノーシスと呼ばれる約2Mの機動兵器を5体形成する。グノーシスは両手に装備したマシンガンとレールガンを撃ちながらゾンビに

突っ込んでいった。

「散布装置までもう少しです」

「よっしゃあー！」

アインハルトが呼び掛け、龍騎Sが散布装置のある施設に突入しようとしたその時、

「フリード、ブラストレイ……」

「ぐはっ！」

大きな炎が龍騎Sを吹き飛ばした。

「この炎、まさか……」

アクエリアスは炎が飛来してきた方向を見つめる。そこに足場はなく、桃色の短髪を持つ少女が乗る飛竜が空を飛んでいた。

「皆さん、な『邪魔！』えっ！？ FINAL ATTACK

RIDE:A・A・A・AQUARIUS」

少女……キャロル・ルシエがはるくに喋る間もなくアクエリアスの必殺の砲撃によって撃墜された。

「いつもより約500字多めに書いているんだ。余計な邪魔はするな!」

「そういうメタな事は言わないでください」

アインハルトはアクエリアスに突っ込む。アクエリアスは何事も無かった様に散布装置にワクチンをセットし、装置を起動させた。ワクチンは校舎中の空気、水の通路を通って高等部の全エリアに広がっていき、ゾンビ達は元に戻っていった。こうして、クッキングハザード事件は幕を閉じた。

～翌日～

「ふう、ここが事件現場ですか」

事件の影響で休校になったACE学園高等部校舎に白衣を着た1人

の女性がやってきた。

「ゾンビ化した人達がきちんと元に戻ったかどうかの最終確認が主な仕事ですし、ちゃちゃっと終わらせてさっさと帰りますか」

まるで少女を思わせる容貌の女性 朝凧イルスイ は医療現場という名の戦場へ行くべく学園に足を踏み入れた。

第5話『代理教師』

A C E学園高等部を一時閉鎖に追い込むほどの被害をもたらした「クッキングガザード事件」、管理局風に言えば、「S & S K事件」。

事件の解決から5日後、なんとか運営が再開できるようになった日の朝からこの話は始まる。

「待ってたよ、楓ちゃん」

2・Cの教室の扉が開かれると同時に女好きで有名な緑葉樹みどりばこうきがルパ
ンダイブする。だが、その先にいたのは、

「おはよう、緑葉樹君」

土見稟だった。稟は、親友？の樹をなんの躊躇もなく殴り飛ばし、
樹は弧を描きながら窓の外へと飛んでいった。

軌道上にいたアインハルトは素早く土樹の手を引いて避ける。

「大丈夫でしょうか、緑葉君？」

「大丈夫だろ」

稟は隣にいた恋人兼幼馴染の芙蓉楓と教室に入る。

「5日間顔を見なかったけど、相変わらずだな、稟」

「その台詞はあいつに言ってくれ、稟」

自分の席に座っていた土樹は稟に苦笑しながら言葉をかけた。稟はいかにもうんざりしているといった表情で対応する。近くにいた楓も2人の会話に加わる。

「そういえば、事件の規模の割に授業の再開が速いですね。教師と生徒がかなり被害にあったと聞いているんですけど」

「ええ、私達が確認しただけでもかなりのゾンビがいました」

土樹達ではなくアインハルトが楓に相槌を打つ。その時、ちょうど良いタイミングでチャイムが鳴り、皆は素早く席に着く。だが、入ってきたのは、彼らの担任ではなかった。

「諸君、席に着きたまえ」

土樹とアインハルト以外の教室にいた生徒全員が啞然とする中、教室に入ってきた金髪の男性は教壇で自己紹介を始める。

「私はグラハム・エーカー。君達の担任が倒れたらしいので急遽ミッドチルド学園より呼ばれて参上したのだ」

(やっぱり…)

(あの時の花見で戦った先生ですか)

紅女史が倒れたと聞いてクラス中がざわめく中、目の前の相手は、土樹とアインハルトが別世界で1度戦った相手だと冷静に把握する。

「諸君、静粛に！ 本日より3日間、私ともう1人の教師が全ての授業を代行させてもらう。では、これより授業を始める！！」

周りの戸惑いなど気にせずにグラハムは授業を始めた。

【1時間目・日本史】

「本日は、刀の歴史について勉強する」

グラハムは黒板にチョークで刀の絵を描いた。

「日本において刀剣類は、古墳時代から作られていたが、一般に私達が日本刀と呼んでいるものは平安末期に出現している」

「へえ、そうなのですか」

「日本刀にはそんな歴史があっただね」

新聞部の麻弓「タイムと神界の王女であるリシアンサスは素直に感心する。

一方、1度グラハムと出会ったことのある土樹とアインハルトはそのまともさに戸惑っていた。

「花見の時に受けたイメージとは全然違うな」

「授業はまじめにやる先生ということでしょうか？」

「そう思いたいところだが、ティアナ辺りの反応を見る限り、その可能性は低そうだ」

2人は、マルチタスクを活用し、授業を受けながら通信念話で周りにばれないように会話する。

グラハムは生徒達が自分の授業についてきていることを確認して、話を進めた。

「刀についてだいたい話し終えたところでこれより本題に入る」

グラハムは黒板を消し、新たに別の絵を描く。

「次は、私の大好きな ハム について話をする!!」

グラハムはこれが本題だと言わんばかりに真顔で黒板を思いつきり叩く。そこに、富士見書房出版の小説に出てくる某お子様生徒会長の影が見えたのは気のせいではないだろう。

“ やっぱり…”

“ そう言えば、ハムが好きな方でしたね”

土樹は「やっぱりそういう人なんだ」という視線でグラハムを見つめ、アインハルトは冷静に状況を把握していた。

「先生、それはむしろ世界史ではないでしょうか？」

拳手して質問した音無にグラハムが無言で近づき、左手を上げた。

「ハムチヨップ!!」

「ぐはあっ!!」

グラハムは叫びながら音無に手刀を振り下ろし、音無の顔を机にめり込ませた。

「ハムに対する侮辱はいつさい許さん!!」

グラハムは手を払いながら教壇に戻っていった。

【2時間目・化学】

「初めまして。私は朝凧イルスイです。これから3日間よろしくお

願います。

グラハムの授業の後、入ってきた小柄な白衣の女性が礼儀正しく挨拶する。

「前世の頃から愛していました!!」

いつの間にか復活していた樹がボロボロの体を引きずりながらさっそくナンパしていた。

「お気持ちは嬉しいのですが、私は」

イルスイは台詞を途中で切り、左手の薬指に付けてあるものを樹に見せつけた。瞬間、樹は石のように固まってしまった。

「これから授業で使う物を渡しますね」

イルスイは四次元トランクから耐熱容器に入れられた加熱されて赤くなっている炭を取り出し、1列ごとに渡していく。

「これ、炭ですよね？」

「何に使ったんだろうね？」

麻弓とシアを始め、生徒達は、手渡された炭を見て頭を傾げていた。

「何か嫌な予感がする」

だが、土樹は違和感を感じていた。仮面ライダーとしての勘が彼に危機を告げていたのである。次に渡された2つが、その勘は正しいと告げていた。

硝石 と 硫黄 である。

樹も渡された物を見て何をやるうとしているのか分かったようだ。

「ちょっと待ってください！ これ、火薬の材料ですよね！？」

教室が爆破されてはたまらないと思った土樹は声を荒げて確認を取る。

「てへっ、バレちゃいましたか」

かわいらしくチロリと舌を出すイルスイ。反省する気が微塵もかんじられなかった。残りの授業もこんな感じに進んでいった。

【放課後】

「今日は、いつも以上に疲れた…」

いつも以上に個性的な教師による授業に土樹は疲れたようだ。帰り道を歩くその姿からは脱力感が漂っている。

「良いじゃないですか、土樹。それに、元々この学園はこついう場所ですし」

一方、土樹の隣を歩いているアインハルトはいたって普通にしていた。

「そう言えば、今日はカレハさんからフローラで新作ケーキが出て聞きました。よかったら、一緒に行きませんか？」

「お、良いね、それ」

先ほどまでの疲れはどこに行ったのか土樹は元気にアインハルトと一緒にフローラへと向かっていった。

第6話 『終焉を継ぐ者と霸王のピギンズナイト』

「ずっと疑問に思っていたんだが、」

「何だ、レイ？」

高等部の図書室で土樹とアインハルト、レイとヴィヴィオが読書を楽しんでいると、レイが話を切り出した。

「土樹とアインハルトって、どんな風に出会ったんだ？」

「ああ、そのことから」

「あの時は、関係各所が驚愕したよね。だって、いつの間にか付き合っていたんだから」

レイの問いに土樹が応答し、ヴィヴィオが当時の状況を語る。

「確か、高町家に居候して3年後のあの時だったな。僕とアインハルトが仲良くなったのは」

土樹はアインハルトとの出会いの話を語り始めた。

あれは、ヴィヴィオやリオ、コロナと練習場にストライクアーツをやりに行った時だったな。

僕は、リオと組み手をして汗をかいた後、スポーツドリンクを飲みながらヴィヴィオ達を探していた。

「土樹さん、なかなかやりますね」

「ガンナーといえど仮面ライダーは近接スキルが必須と言って過言じゃないし、近づかれたら終わりっていうのは余りに情けないからね」

「攻撃よりも受け流すことに重点を置いているのは、それが理由なんですね」

「そうだよ」

首にタオルをかけながら目を輝かせるリオと話をしながら僕達はヴィヴィオ達と合流するために足を進めていた。

その時、ある少女が目に入り、足を止めた。

蒼と紫の虹彩異色に長い壁銀の髪、それと華奢な体が特徴的な少女だった。

その前にいるのは、同じ年ぐらいの男子だった。

「どうやら、これから組み手をしようだ。」

「中等部1年のアインハルト・ストラトスさんだよな、あの人。狙っている男子はけっこう多いって聞くけど、格闘技をやっているとは知らなかったなあ。」

「アインハルト・ストラトス……」

リオに言われるまでもなく、当時隣のクラスだったその少女のことを僕は知っていた。もちろん、思いを寄せる男子がいることも知っているし、僕自身も「Yes」か「No」かと聞かれれば、「Yes」よりだ。無口で何を考えているのか分からないけど、憂いをおびたその少女のことがとても気になっていた。

そんなことを考えている内に2人の組み手が始まった。その様子に僕は心を奪われた。アインハルトの動きは、華奢な見た目には似合わずに力強く、舞のように美しく、思わず見惚れてしまった。ぼーっとしている間に組み手は、ストラトスさんが相手の腹部に拳をめり込ませて終わった。

「すごいね、あの人。相手の男の子、そこそこの名が知れた人だったんだよ。」

「あ……ああ。」

直後にリオが話しかけてきても生返事しか出来なかったことをよく覚えている。組手を終えたストラトスさんはこっちに向かって歩いてきた。何か物足りなさそうな顔をしながら…。一瞬、僕とストラトスさんの目があった。少し見つめ合った後、ストラトスさんは顔を赤くして早足で立ち去っていった。なんだか、それが寂しい気がした。

組み手を終えた後、私は心臓が止まりそうになりました。だって、密かに恋い焦がれていた仮面ライダーの前杉さんと目があったのですから。あの人は気づいていないようですが、この間私が天使の輪を持った怪人に襲われた時に助けてもらっているんです。

少し見つめ合った後、恥ずかしくなって早足で立ち去り、先ほどのことを考えないようにしながら廊下を歩き、人気のないところにあるベンチに座りました。

それに、たとえどれだけ恋焦がれようと私と彼と結ばれることはない。だって、彼の周りには魅力的な人達がたくさんいるのですから。

「はあ…」

まだまだ。まだ力が足りない。この程度じゃ……

「何かを守ることは出来ない」

私のため息をつくとき、予想もしていなかった声が聞こえてきました。

「それが、さっきから物足りなさそうな顔をしている理由か？」

「!？」

なぜ前杉さんがここに……？

「それは、ストラトスさんがほっておくと何かとんでもないことをやらかしそうな感じがしたからさ」

っ！？ この人はどうやって私の心を!？

「経験と勘だよ」

彼はそう言って私の近くに座りました。

「ストラトスさんが何で力を求めるのか僕には分からない。だけど、これだけは言える。どんなことがあったとしても君は君以外の何者でもない」

「前杉さん……」

「さっきの試合も見ていたけど、とても美しかったよ。また見てみたいな」

前杉さんにはにつこりと微笑みながら私にそう言いました。美しかったです……？ 思いもよらない言葉で私の頭はパニックになりました。それでも言葉を返そうと必死に頭を振り絞り、ようやく発することが出来ました。

「前杉さん……！」

「何？」

「私と、」

付き合ってください……！！！！」

何言っているんですかああああああ、私は！？ ほら、前杉さんも呆然としているじゃないですか！？

「い、今のは『いいよ』えっ!？」

い、今なんと言いましたか!？」

「君からの告白にOKと僕は返したんだよ、ストラトスさん」

「ほ、本当に私なんかでいいのですか？」

「もちろん。君が相手ならこっちからお願いたいくらいだ」

それを聞いて、私の意識は遠のいていきました。

「それから、少しずつ仲良くなって、互い呼び捨てにするようになったんです」

「あれからしばらくたった時の保健の授業の後は大変だったな?いきなり顔を赤くして公衆の面前で『私と子供を作ってください』って言ったからクラス中が沈黙に包まれたよ」

「その後、現実を受け止められないアインハルトさんのファンクラブが土樹に襲い掛かったりしたよね」

「大変だったんだな…、お前も」

2人が出会いについて話し終わった後、4人はそれぞれにリアクションを取る。

「アインハルトも最初の頃は初々しかったけど、はやてさんが変な知識を次々と仕込むせいでR18な方向へとどんどん積極的になっていったな」

「今の私は嫌いですか、土樹？」

「いや、むしろ好きだよ」

「土樹…」

「アインハルト…」

2人は甘い雰囲気を出しながら互いに顔を近づけ、キスをしようとする。

「公共の場所でそんなことをするな、このバカップルが！雰囲気が甘すぎるんだよー!」

「そつだよ、ヴィヴィオもTPOをわきまえてほしいな」

「？恋人なら普通だと思うけど…」

「そつですよ、2人とも。これは、普通です」

「駄目だ、こりゃあ」

「そつだね」

士樹達のバカップルぶりにもう1組のカップルは呆れるばかりであった。

第7話『クリスマス／＼との邂逅』

クリスマス。それは、1年の中でも重要な時期であるために多忙な店も多い。土樹が住んでいる高町家が経営する翠屋もその1つであった。

「いらっしやいませ」

「何名様ですか？」

玄関では、高町なのはとその義妹であるヴィヴィオが接客をしていた。時期が時期なので、来ている服は、通常時の制服ではなくミニスカサンタ服である。少女達のミニスカサンタ服姿見たさにやってくる男性客は多く、跡を絶たなかった。

「ご注文は、コーヒーとモンブランが1つずつでよろしいでしょうか？」

土樹に会いに来たインハルトも巻き込まれ、ミニスカサンタ服に着替えて客の注文を取っている。

「ねえ、バイトなんかしていないで俺と遊ばない？」

好色な目でなのはに近づく男性客の頭部を苦無くないがかすめる。客の額からはつつすらと血が滲み出ている、その表情は恐怖に染まりきっている。

「俺の妹に…、手を出すな!！」

怒気を発しながらどこぞのガンダムパイロットのごとき口調で喋るのは、たまたま実家に帰ってきていた高町家長男の高町恭也（既婚者）である。

同時刻、アインハルトにちよっかいを出そうとした別の男性客の頭部に銃弾（非殺傷設定）が撃ち込まれる。

「お客様、人の彼女に手を出すのはやめてくれませんか？」

左腕でプレートを持ちながら器用に右手のドライバーで男性客の頭を撃った土樹は笑顔で脅迫する。実は、桃子が安心して女性店員にミニスカサンタ服といった服を着せられるのは、土樹や恭也みたいな用心棒がいるおかげであった。それが伝わっているのかいないのか、「翠屋の男性店員には気をつける」という暗黙のルールが翠屋の客にはあった。

「相変わらずね、土樹達は」

翠屋のテーブルで高等部2年のルーテシア・アルピーノはケーキを頼張りながら土樹達の様子を見ていた。近くには、ヴィヴィオの同級生であるコロナヤリオも一緒にいる。

「仕方ないよ、ルーちゃん。恭也さんはシスコンだし、土樹さんはアインハルトさんが大好きなんですから」

「そうだねえ。あ、チーズケーキ1つ追加でお願いします」

コロナ目の前の状況を既に日常の一部として受け入れているし、リオはいちいち反応するのも面倒なようだ。

「分かったよ、リオ。桃子さん、チーズケーキ1つ追加です」

「はい」

土樹は厨房にいる桃子に追加の注文を伝える。

【午後6時】

「ふう、ようやく落ち着いてきたね」

なのはが翠屋の店内を見渡すと、客が来店するペースは確かに落ち着いてきていた。既にヴィヴィオとリオはコロナについていく形で泊まりにいつている。

「僕達、そろそろ時間なので上がりますね」

土樹がそう言っつて、更衣室に向かおうとすると、アインハルトは自分に着ている服を見る。

「桃子さん、この服しばらく借りていいですか？」

その声を聞いて厨房から顔を出していた桃子の顔が笑みを浮かべる。

「ふふふ、別にいいわよ」

「土樹、早く着替えてください。私の準備はすぐ終わりますので」

桃子の了承を得たアインハルトは土樹に着替えを催促する。

「アインハルト、まさかその恰好で外に出るつもりじゃ……」

「そうです。せつかくこんな恰好をしたので土樹にもっと見てもらいたいんです。あの、駄目ですか…?」

「うっ!」

アインハルトが涙目+上目づかいで土樹を見つめる。

そして、土樹は大好きなアインハルトにそんな風に見られて理性を保てるような人間ではない。つまり…

「い、嫌なわけないだろ!」

即陥落である。

土樹は照れ隠しにさっさと着替えに行った。

外は、雪が降っており、商店街では幻想的な光景が広がっていた。

「やっぱり外は寒いですね」

ミニスカサント服のインハルトに冬の寒さは堪えるようで、土樹の左腕にべったりくっついていて、土樹はむしろ左腕に押し付けられている2つの膨らみを楽しんでいた。

「そんな恰好で出歩くからだよ」

対する土樹は普通にコートを着ている。

「私としては、欲情した土樹にいやらしい目で『じゃあ、僕が温めてやるよ』と言って、アレなことをしてほしいです」

「そういうことばかり言う奴にはこうだ！」

土樹はいきなりインハルトに抱き着く。突然のことにインハルトは顔を赤くする。

「ふうん、まだそういう部分が残っていたんだ」

「あ、あの…」

「だ〜め！ 離さないよ！！」

土樹はインハルトを抱きしめる力を更に強め、インハルトも土

樹に体を任せていた。この時、近くの店でブラックコーヒーを飲む人が一時的に増加したらしい。2人がラブラブモードを発動していると、1人の少女が空から落下してきた。どこかの民族衣装らしき白地に黒いラインの服、後ろで2つにまとめている紅い髪に人ではないことを示す天使のような紅い翼が特徴的な少女だ。少女は落下中になんとか体勢を立て直し、無事に着地できた。少女を確認した2人は抱擁をやめて少女と向き合った。

「すみません、人を探している途中に空間の歪みに巻き込まれてしまったんです。ここはどこでしょうか？」

「ここは、日本のACE学園です」

アインハルトが答えるが、少女は無言で首を傾げていた。

「(ACE学園を知らない。空間の歪みに巻き込まれたということも含めると、異世界からきたというのか)君、名前はなんて言うの？」

「イカロスです」

その名前を聞いて2人の目の色が変わった。

「イカロスって、確か刹那さんが探していた女の子の名前じゃ……」

「刹那を知っているのですか!？」

今度は、イカロスと名乗った少女が食いついてきた。土樹は脳内から目の前の少女に関する情報を必死にかき集めていた。

「（彼女の反応と事前に聞いていた知識から考えると、彼女が刹那の探していた人物で間違いないようだな）現在、刹那は君の世界の日本にある風都と呼ばれる街の高校に通っている」

「風都…?」

風車がたくさんある街だ。そこで、破壊の後継者「仮面ライダーゲイザー」として暮らしている

「仮面ライダー…。今噂になっているアレですか?」

「そうだ」

「彼も貴方のことをずっと探していました。早く会ってあげてください」

「ありがとうございます。あの、貴方達のお名前は?」

イカロスは2人に感謝し、その名前を問う。

「僕は、終焉の後継者「仮面ライダーアクエリアス」の前杉土樹だ」

「その恋人、アインハルト・ストラトスです」

「そして、僕は仮面ライダーディエンドの海東大樹さ」

土樹とアインハルトはいきなり後ろから声をかけてきた大樹に驚いて後ろを振り向く。

「やあ。元気そうだね、お2人さん」

大樹は右手で銃をかたどり、2人を狙い撃つようなポーズを取る。

「大樹さんこそお元気そうで良かったです」

驚きこそしたが、土樹は素直に大樹と会えたことを喜ぶ。

「君が、刹那の探していたお宝か。2人は忙しそうだから僕が送っていくよ」

「よろしくお願いします」

大樹はオーロラを発生させ、イカロスと共にくぐってその姿を消した。2人が去った後には、土樹とアインハルトだけが残された。

「土樹……」

「ああ、いよいよ始まるんだ、新しい物語が」

2人は感慨深そうに大樹達が去った後を見つめていた。

第7話『クリスマス／＼との邂逅』（後書き）

いろいろと準備があるので年内の更新は、これで終わります。

また来年、よろしくお願いします。

第8話『バニーな女性たちノドツキりお正月』

【高町家、朝】

自室のベッドで眠っていた土樹は携帯の目覚ましで目覚めた。土樹はベッドから降りようとした時、心当たりのない膨らみがあることに気がついた。

「何だろう、これ？」

土樹がシーツをめくると、そこにはいつの間にも潜り込んでいたのか、アインハルトが何故かコミックアラカルトの扉イラストで来ていたようなビキニに近いバニーガール姿でいた。

「……………朝ご飯までまだ時間あるし、二度寝するか」

土樹はシーツをかけ直した上でアインハルトをしっかりと抱きしめ、再び寝ることにした。

【30分後】

「土樹、あけましておめでとうございます」

「あけましておめでとう、アインハルト。新年早々男としては嬉しいんだが、何故そんな恰好を？寒くないのか？」

土樹はさっき聞けなかった質問を意識のはっきりしているアインハルトにした。

「今年が兎年で、土樹を誘惑するためです。後、土樹が温めてくれましたので寒くありませんでした」

アインハルトは顔を赤らめながら言う。

「それだけじゃなくて枕元にある猫のおかげでもあるだろう」

土樹は枕元にあるアインハルトのデバイス「アステイオン」を見た。見た目はただのぬいぐるみで、とてもデバイスとは思えない一品だ。

「2人共、ご飯が出来たわよお！」

1階から桃子が土樹達を呼んだ。もう1度言う、土樹『達』である。

(この件、桃子さんが絡んでいるな)

土樹は「あの人なら普通にやりかねないな」と考えるが、私服に着替えてアインハルトと1階のリビングに入った。

すると、

「「あけましておめでとございます、土樹さん、アインハルトさん」

「あけましておめでとございます」

目の前には何故かアインハルトと似たようなバニーガール姿のコロナとリオがいた。土樹がその事実には驚きの目を見張って周りを見渡すと、他にも同様の恰好をしたヴィヴィオ、なのはがそれぞれの相手であるレイとユーノにくつついていた。この場に居る女性陣で桃子と高町家長女の高町美由希だけがバニーガール姿ではなかった。ちなみに、ここに現在ここにいない恭也は月村邸にいたりする。

「桃子、お前もバニーガール姿になったらどうだ？充分似合うと思っぞ」

「あなた、私はもうそんな年じゃないわよ」

高町家の大黒柱である高町士郎は誰が見ても分かるぐらい残念そう

にしていた。

「やあ、土樹」

「あ、明けましておめでとう」

「明けましておめでとう、2人共」

レイは普通に受け入れているが、堅い所があるユーノはまだ照れが残っていた。

「何故女性陣がバニー」『兎年だから』……」

先程アインハルトにした質問を再びするが、その結果に土樹は閉口するしかなかった。とりあえず、土樹はアインハルトとテーブルに着くことにした。

「さて、皆がそろったところでお節を食べるわよ」

『いただきます』

皆は思い思いに箸を取り、好きな物を食べ始めた。

「ユーノ君、あ〜ん」

「あ、あ〜ん」

さっそくなのははユーノとイチヤつき始めていた。

「コロナ、この黒豆、味がおかしくないかな？」

「確かにそうだね」

「それ作ったの私だよ、リオちゃん、コロナちゃん」

「え!？」

「美由紀さんが作ったんですか!？」

リオとコロナは自分が食べた黒豆を作ったのが、アンブレラ社のTウイルス並にやばい料理を作るシャマルやセルと並ぶ腕前の美由紀が作ったと知り、顔が青ざめる。

「これを2人で飲め！」

土樹が素早く万能薬のボトルをリオに手渡す。リオはそれを半分ほど飲んだ後クロックアップに匹敵する速さでコロナに渡す。

「助かります、土樹さん」

「どういたしまして」

リオは万能薬を渡してくれたことに感謝し、土樹は素直に応える。

「ちよつと！！ 私の料理を何だと思ってるの!？」

当然のことながら美由希は抗議する。しかし、

『猛毒』

美由希以外の全員 ヴィヴィオやコロナでさえも 一蹴される。それで落ち込む美由希を置いて高町家+ は食事続けることにした。

「土樹さん、伊達巻卵が好きでしたよね」

土樹の左側にいたコロナがさいばしで重箱から伊達巻卵を取って、土樹の取り皿に置く。

「ありがとう、コロナ」

「良いですよ、これくらい」

土樹の言葉にコロナが笑顔で返す。

「土樹、あ〜ん」

「あ〜ん」

それを見たアインハルトが自身の皿にあった黒豆を土樹に食べさせ、視線でコロナをけん制する。

“土樹は私のものです、コロナさん”

“何のことですか？私は命を助けてもらったお礼をしただけですよ”

念話で会話する両者の間で黒いオーラが発生し、空気が張り詰める。アインハルトは「誰にも渡しません」と言わんばかりに土樹の右腕に密着するが、コロナは眉毛一つ動かさず、笑顔のままだった。

(こづいづいのを修羅場というんだろうな)

土樹は普通の人間ならあたふたするであろうこの状況を恋人と密着できるといふ理由でむしろ楽しんでいた。

「（もつと楽しむか）アインハルト、口を開けてくれ」

土樹は肉レンコンを口でくわえ、ポッキーゲームの要領でアインハルトに突き出す。

「わ、分かりました」

アインハルトは赤くなりながらもレンコンを口に含む。2人はレンコンを黙々と食べ続け、最後に軽くディープなキスをした。

「お楽しみは後で取っておくとしておこう。まずは、お節を楽しみたいからね」

「そうですね、土樹」

それを見た人達の反応は様々だった。

「見せつけてくれるじゃないか、土樹」

「うー、2人には負けてられないね」

上からレイ、ヴィヴィオの反応である。

「相変わらず仲が良いね、2人共」

「そうだね」

なのはとユーノは土樹達を暖かく見守り、高町夫妻はレイとヴィヴィオよりも張りきっている。リオとコロナは抱き合って（Not百合）キヤーキヤー騒いでいる。

今日も、そしてこれからもバカカップルはバカカップルであることをやめないであろう。

第9話 『敵情査察』

高町家リビング。そこでは、桃子がネルフの某司令を思わせる様子でテーブルに座り、その周りには土樹を含めて高町家に住んでいる人たちがそろっていた。

「では、これより会議を始めます。まず、手元の資料を読んでください」

桃子の言葉に従い、皆が手元にある資料を読み始めた。

「こ、これは…!?!」

その内容を読んだ途端に土郎は震え始めた。

「何てことなんだ……」

土郎はその資料を読んで、まるでこの世がもうすぐ終わる様な表情をしていた。

「翠屋よりもフローラの方が僅差で人気が上がだなんて!?!」

士郎は盛り上がっているのに反して他の面々はそれほど盛り上がっていない。

「士郎さん、慌てすぎですよ」

「士樹の言う通りだ、父さん」

「リアクションがオーバーすぎるよ」

士樹、恭也、美由希の発言に士郎はテーブルを思いっきり叩いた。

「何を悠長に構えているんだ、3人共!？」

「そうよ、これはほっとけばいずれ大きな差になるわ」

「はあ」、「まあね…」、「確かにそうだね」とそれぞれにリアクションを取りながら3人は話を聞く体勢に入る。

「で、どうするの、ママ?」

現状をどう打開するのか気になったヴィヴィオが桃子に尋ねる。

「敵を知り、己を知らば、百戦危うからずと言つわ。そこで、フロ
ーラへの偵察を決行します」

「誰が行くの、お母さん？」

なのはが桃子に質問する。

「それは、もちろん」

【商店街】

「というわけで、僕達はこうしているの」

「いきなりフローラに行こうと言ったのは、それが理由だったんで
すね」

桃子司令（誤字ではない）の命により土樹はアインハルトを伴って
フローラを目指していた。それから数分歩くとフローラに着き、2
人は中に入った。

「いらっしゃいます〜」

どこかのんびりした声で2人を迎えたのは、土見ラバーズの一員でACE学園高等部3年のカレハだ。なお、余談だが、「癒しのカレハ」という2つ名を持っている。

「まあ、土樹さんとアインハルトさんじゃありませんか」

「カレハ先輩、こんにちは」

「今日、バイトだったんですね」

「ええ」

不意に出会った3人は、軽く言葉を交わす。

「お2人様でよろしいですか？」

「はい」

人数を確認するカレハに土樹が答える。

「では、こちらにご案内します」

カレハは2人を窓に近い席に案内し、2人は向かい合うように座る。

「ご注文がお決まりになったらお呼びになってくださいね」

カレハはペコリとお辞儀をして立ち去っていった。カレハが立ち去ったのを見た土樹は周りを見渡しながら念話でアインハルトと話す。

“改めて見るけど、特に問題点はないな”

“店員の教育もきちんとなされていますし、店の掃除も行き届いてん！？”

“どうしたんだ、アインハルト？”

“あつちを見てください”

土樹がアインハルトの指さす方を見ると、

「では、少々お待ちください」

何故かウェイター姿でバイトをしている大樹の姿があった。2人の視線に気づいた大樹は注文を厨房に伝えたと、近づいてきた。

「やあ、お2人さん。今日は、デートかい？」

「そんなところですよ」

「大樹さん、何故フローラでバイトをしているんですか？お宝の情報収集ですか？」

土樹は、怪盗が本業である大樹が何故こんなところでバイトをしているのかを尋ねる。

「違うよ、土樹。たまには喫茶店で働くのも良いかなと思ってここにいるのさ」

「そうだったんですか」

「それより、僕が開発した新メニュー、君達が試してくれないかい？」

そう言って、大樹は一枚の紙を取り出して土樹とアインハルトの前に置く。

「変哲もないチョコとバナラがツイスター状になっているドリンクですか」

「何か仕掛けでもあるんですか、大樹さん？」

土樹の質問に大樹は不敵な笑みを浮かべながら答えた。

「それは、実際に注文してからの楽しみだよ、土樹」

【商店街、ビルの屋上】

「こちら偵察B班なのは。A班の2人が大樹さんと接触したもよう」

『了解したわ、なのは。そのまま偵察を続けてちょうだい』

「分かったよ、お母さん」

なのははヴィヴィオと一緒に双眼鏡でフローラとその周辺の様子を偵察していた。桃子との通信を終えたなのははいったん双眼鏡を外し、隣のヴィヴィオに話しかけた。

「疲れるねえ、ヴィヴィオ。偵察ってここまでやる必要あるのかな？お兄ちゃん達もどこのスパイみたいにフローラの建物を探って

いるし」

なのははため息をつきながら愚痴をこぼす。

「今更だよ、お姉ちゃん。こういうのは、スパイ映画を実演していると思えばいいんだよ」

聖王の血はサムズアップをしながらノリノリで某初代機動戦士のパイロットと同じ2つ名を持つ少女に答える。

「土樹達はともかく私達は下手したら捕まるよね…?」

なのはは自分の身を心配しながらもとりあえず偵察を続けることにした。

【フローラ】

「お待ちせしました。ご注文のチョコバナニラドリンク特別《・・・》サイズお1つでございます」

結局、土樹とアインハルトはチョコバナラドリンクを注文した。

が、注文してからしばらくしてカレハが持ってきたのは、明らかに1人用じゃないサイズのドリンク1つだった。

「……………」

「……………このサイズを頼んだ覚えはないのですが……………」

「ちよつとしたサプライズですわ。はい、これ」

土樹が沈黙し、アインハルトが困惑する中、カレハは先が2つに分かれたカップル用のストローを渡してきた。

「面白いサプライズですね、カレハさん。あなたが考えたんですか？」

「このサプライズを考えたのは、私じゃありませんわ。あの人です」

再起動を果たした土樹が素直に思ったことを述べるが、カレハはその言葉を否定し、笑顔で大樹を見つめる。

「あの人か」

「そうですね。大樹さん、ここに来てからいろいろと面白いアイデアを出してくれるので最近客足も増えてるんですの」

それを聞いた土樹は事件の謎を解いた某少年探偵の様な顔をした。

「なるほどね、そういうことか…」

「本当に自由な人ですね、大樹さんは」

「せっかくだし、楽しもうか」

「ええ、ドリンクの味をしっかりと味わいませんかね」

今日フローラに来た目的を達成した土樹とアインハルトは用意されたサプライズを楽しむことにした。

第9話『敵情査察』 (後書き)

テストがあるので、これ以降はしばらく更新できません。

申し訳ありませんが、しばらくお待ちください。

第10話『いつか絶対に私はあなたを捕まえて見せます!』 (前書き)

このカップリング、ACE学園の執筆前から考えていました。

第10話『いつか絶対に私はあなたを捕まえて見せます!』』

土樹達と比較的親しいナカジマ家のクイント・ナカジマはこう言った。格闘技には、持久力のある柔らかい筋肉が必要だと。そのため、格闘技をやっている面々は季節に関わらず定期的にプールに行っている。

今回は、それに付き合う形で土樹が来ていた。

「負けませんよ、ヴィヴィオさん!」

「それは、こっちの台詞です!」

競泳水着を着ているヴィヴィオとアインハルトは50Mのプールで競争していた。土樹は近くの休憩用スペースからアインハルトに見とれていた。

(アインハルトにここまで競泳水着が似合うとは思わなかったよ)

「何を見てるんだい、土樹?」

土樹がハツとして後ろを振り返ると、右手にドリンクを持った大樹がいた。

「ああ、ストラトスさんとヴィヴィオが泳いでいるのか。あつ、ヴィヴィオの方が先に向こう側まで着いたね」

「ヴィヴィオも瞬発力が有りますからね。御神流も少し習っていませんからライダーでも下手したら死にますよ」

「この生徒は怪人とやり合うのにある程度慣れてるからね。それじゃあ、僕はあっちの方に行くよ」

大樹が土樹から離れていくと、プールから上がったヴィヴィオとアインハルトが歩いてきた。

「なかなかやりますね、ヴィヴィオさん」

「アインハルトさんこそずいぶん速かつ　イクス、何してるの？」

ヴィヴィオの声に反応した土樹が左斜め後ろを見ると、木の陰に隠れていたイクスヴェリア（白いフリルのある青いビキニ）の姿があった。

「いえ、その……」

イクスヴェリアはもじもじしながら大樹をチラッと見ていた。それを確認した土樹はヴィヴィオとアインハルトにアイコンタクトをした。

「い、いきなりなんなんですか？」

「容疑者を逮捕します」

「さっそく取り調べをしましょう」

2人に腕を掴まれたイクスはそのまま土樹が座っていたテーブルまで連れてこられた。

「いきなり本題に入るけど、イクスは大樹さんのどこが気に入ったの？」

次世代型文系格闘魔法少女は単刀直入に切り込んだ。

「いえ、そ、そんな……」

「現場は目撃されているから言い訳は出来ないよ」

「さあ、素直に吐いちゃってください」

ヴィヴィオとインハルトは刑事ドラマさながらの取り調べを行っていた。第三者が見れば、絵になる光景だが、迫られている本人がらすればたまったもんじゃ無い。2人の迫力に負けたイクスはしぶ

しづ白状した。

「きっかけは6年ほど前になるんです」

（僕が高町家に住むようになって2年目ぐらいの時か）

「知っての通り、それまでかなりの年月を眠ってはわずかな間だけ起きるを繰り返していた私は平和な青空というものを知りませんでした。そんな私に光を示してくれたのが大樹さんなんです」

（あの人、1人で原作でのマリアーヂュ事件を解決したのか）

イクスの話を聞き、土樹は己が師匠の行動に素直に感心していた。

「いろんな世界を旅した話だったり、お宝を取る時に苦労した話だったり、大切なものを守るために絶望的な状況に立ち向かうライダーの話をしていたあの人の話はとても輝いていました。それだけでなく、あの方は私を縛っていた鎖を壊して青空を見せてくれたんです」

そう言って、イクスは女性型の人形と思われるものが描かれたカードを取り出した。これは、ブレイドタイプの仮面ライダーが主に使用しているラウズカードを学園が改良した物で、特定人物の能力を封じる効果がある。もう分かっている読者もいると思うが、今のイクスにはマリアーヂュと呼ばれる人形を生成することは出来ないということである。

「その後、私はACE学園に来てヴィヴィオやスバルと出会ったんです」

イクスは微笑みながらそう言った。

「それからあの人の側にいたいと思うようになっていろいろやってみたんですが……」

イクスはため息をついた。

「鋼糸は間違っただけ自分をがんにがらめにしてしまっし、銃は重くて使いにくいですし、なかなか上手くいきません」

「恭也さんの盆栽が全滅したのは、君のせいだったのか」

土樹は合点がいった。

「私にはあの人の側にいる資格が無いんでしょうか？」

イクスは意気消沈し、「どうせ私なんか……」とだんだんネガティブな状態になっていった。分かりやすく言えば、キックホッパーに

なつた後の矢車状態である。

「元気出してよ、イクス」

「そうです、戦いばかりが全てじゃありませんよ」

「彼女達の言う通りだよ」

突然登場した通りすがりの怪盗に4人（特に冥王）はびっくりした。

「だ、大樹さん!？」

「あなた、さっき向こうに行きましたよね？」

「落とし物を探していたら、たまたま君達を見かけたんだよ」

想い人に突然話しかけられてイクスはテンパるが、土樹は普通に大樹に話しかける。

「イクス」

「は、はい!?!」

イクスは緊張のあまりテーブルを叩きながら返事した。

「ストラトスさんも言ったが、人間は戦うことが全てじゃない。サッカーだったり、農業だったり、アイドルだったり、いろいろ道はある。君はもっと視野を広げて自分が何をしたいのか考えた方がいい」

大樹の言葉を聞いたイクスはしばらく考え込んだ後、何かを決意して顔を上げた。

「大樹さん!!」

「なんだい？」

「私には何が出来るか分かりません。ですが、いつか絶対に私はあなたを捕まえてみせます!!　そして、私のものにしてみせます!」

「これ、告白だよね……?」

「告白ですね」

「強引かつ情熱的な告白……、こんな告白は初めてだね」

イクスの告白を聞いてしまった3人は念話で話し合う。

「楽しみにしておくよ。君は良いお宝になりそうだからね」

大樹はイクスに指でっぼうを向けて撃つようなポーズを採って4人から離れていった。

「あの人らしい返事だね……」

「どうしたんですか？」

「アインハルトとどうイチャイチャしようか考えていただけさ」

「もう、土樹ったら……」

「イクス、誰かと付き合う時には自重という言葉をお忘れなでね」

「分かりました」

あいかわらずのバカップルに、ヴィヴィオはイクスと大樹がそうならない事を祈るばかりであった。

第11話『戦興業』

自然豊かな異世界フロニヤルド。

無限に存在する世界の中でも異色を放つ世界である。

その世界では獣耳や尻尾を標準装備している人が暮らしていて、戦争が国民参加型の興行として成立しているのだ。

だが、どこでも行われているだけでなく、怪我や死傷を避けるためにフロニヤ守護力と呼ばれる力の加護を受けている土地で戦争は行われている。

この戦興業が始まる時それぞれの国は国民から参加者を募り、軍の戦力として編成する。

ACE学園のギルドでもその情報は流れており、土樹はレイやアインハルトと共に犬っばい人達の国であるビスコッティ共和国の側につき、猫科っばい人達であるガレット獅子団との戦いに参加していた。

アインハルトが目の前敵兵に向けて拳を振り抜き、戦闘不能にする。

「もらったああああ!!」

攻撃直後の隙を狙い、2名がアインハルトに攻撃を仕掛けるが、どこから飛んできた親指くらいの大きさの鉄玉で撃沈する。

ちなみに、戦闘不能になった人達はけものだま（ビスコッティはいぬだま）というぬいぐるみっぽいものに変身するだけなので心配する必要はない。

「さすがですね、土樹」

「これくらい朝飯前さ」

アクエリアスドライバーの代わりにヴァレリア島産のボウガンを構えた土樹が答える。

「しつつかし、こういう戦もたまには良いな」

大剣で複数の敵を薙ぎ払いながらレイも会話に加わる。

『ビスコッティに勇者シンク・イズミ、軽やかな動きでガレット獅子団の兵士を次々とけものだまに変えていく!!』

試合の実況を担当しているフランボワーズ・シャルレーが味方の活躍を告げる。

「勇者として召喚された中等部の奴も大活躍だな」

「確かシンク・イズミという名前でしたね」

「僕達も負けていられないね」

実況を聞き、会話している3人にビスコッティの伝令が走り寄る。

「ロラン騎士団長から伝言です。辺りの敵はあらかた一掃できたので前線の砦にいる勇者たちと合流してください」

「分かりまし」

土樹達は発言の途中で咄嗟に飛び退る。その数瞬後に膨大な炎がビスコッティ兵を大勢飲み込んだ。

「シグナムさんは今フェイトさんと模擬戦しているから来ていないはずだし今のはまさか……」

脳内の知り合いリストから消去法で順番に検索していくと、1人の男性が引つかかった。そして、炎を放った黒い短髪の男性は、黒髪を後ろで束ねている細目の少年と一緒にゆっくり3人に近づいていた。

「やれやれ、君達も来ていたのか」

「悪いけど、今月の食費がピンチなんです。サクッとやられてくれませんか？」

A C E学園で錬金術兼風紀担当である焰の錬金術師ロイ・マスターグ、高等部1年のリン・ヤオが堂々とやってきて宣戦布告した。

「私もリザへのプレゼントを買うためにお金が必要なんだ。悪いが、とつとと消えてくれ」

「それ、教師が生徒に言っているいいことじゃないだろ!!」

レイの突っ込みを無視し、ロイの炎が再び放たれるが、3人は難なくかわす。しかし、散り散りになってしまった。

「隙あり!!!」

リンはまず3人の中で近接戦闘能力が柳葉刀で最も低い土樹に斬り

かかり、ボウガンを弾き飛ばす。

「しまっ」

「ボーナスいただきー！」

リンが右手に持った柳葉刀で突きを繰り出すが、それは土樹をすり抜けた。

（いない……いったいどこへ行った！？）

リンは即座に辺りの気配を探り、殺気を感じた。振り返りざまに2つのないを叩き落とし、紋章術で姿を消していた土樹に刀を突きつける。

「くっ！」

「まだまだですね、先輩」

リンが柳葉刀を上から振り降ろそうとした時アインハルトがリンを蹴り飛ばし、ノックアウトした。

「大丈夫ですか、土樹！？」

「なんとかね」

「ほらよ、落し物だ」

レイが投げてきたボウガンを土樹は受け止める。

「マスタング先生は俺が倒した。早く先に行くぞ！！ 2人のせいでかなり遅れてしまったからな」

そう言うレイは所々煤けているが、たいしてダメージは受けていないようだった。

というか、ロイの護衛を残しておかなかったこと、アインハルトとレイがある程度射撃にも強いというのがロイの敗因だろうと土樹は思った。

【前線・敵の砦】

「くっ、なかなか手強いね」

「増援はまだか！！」

勇者シンク・イズミとビスコッティ親衛隊隊長のエクレール・マルティノツジが門を突破しようとしているが、敵の抵抗が激しくてなかなか進めず、味方の兵は徐々に削られていつている。

「このままだとジリ貧だ!!」

エクレールが叫ぶ中、砦の見張り塔から矢が放たれた。

「エクレール、危ない!!」

放たれた矢はぐんぐんエクレールに迫り、今にもあたろうとしたその時背後から飛んできた盾となってエクレールを守った。エクレールが後ろを振り向くと、セルクル（分かりやすく言えばチョコボもどき）に乗ってやってくる土樹達がいた。

「ナイスコントロール」

「どつも」

土樹は騎乗したままボウガンを構え、紋章砲を使って見張り塔を破壊した。

「前杉先輩!!」

「悪いね、来るのが遅れてしまった」

「他の奴らはどうした!？」

エクレールが問いただす。

「ロイ先生の奇襲でほとんどがいぬだまになってしまったよ」

「なんだと!？」

「まあ良いじゃないですか。3人だけでも心強いですし」

苦い顔をするエクレールとは反対に明るく前向きなシンク。

「で、どうするんですか？」

「戦況は我が軍がじゃっかん不利だ。故に速攻で勝負をつけたい…
…が、あの門をなかなか突破出来ない」

アインハルトの質問に答え、エクレールは眼前にそびえたつ門を見据える。

「アインハルト、援護するから門を飛び越えて内側から開けてくれる？」

「分かりました」

「今から味方が突っ込む。第1〜第4分隊は盾になれ！！ 弓兵は援護に回れ！！」

土樹の提案をアインハルトが了解し、その意図を汲み取ったエクレールは部下に指示を飛ばす。レイが道を切り開き、土樹達が援護する中でアインハルトは紋章術で一気に飛び上がり、壁を飛び越えた。

その後に出てきた將軍との戦いもなんとか乗り越え、今回の戦はビスコッティ側の勝利で終わった。土樹達は戦勝イベントとして開かれるミルヒオーレ・F・ビスコッティ姫のコンサートに出る前に風呂で汗を流していた。

「今回も面白かったですね」

「途中でマスタング先生が出てきた時はどうなるかと思ったけどね」

「同感だ」

風呂で汗を流した3人は風呂から出て更衣室に入った。

「さてと、お姫様のコンサートを聞いて今日の疲れを吹き飛ばすと思いますか」

「風呂上がりのアインハルトといちゃつきすぎてコンサートの雰囲気壊すなよ」

「分かってるって」

着替えを終えた3人はアインハルトと合流し、コンサートホールに向かった。

第12話 『交流会 / 作者公認である変態』

異世界フロニヤルドのビスコッティ共和国。

その首都でも言うべきフィリアンノ城下町の広場でバーベキューがあり、土樹とアインハルトは一緒にそのイベントに参加する予定の朝凧イルスイを城下町の近辺で待っていた。

「そろそろですね……」

「ああ」

2人が時間を確認しながら待っていると、どこでもドアが出現して中から朝凧イルスイ……

「とうちゃーく」

「ここがビスコッティですか」

「なんで俺がここに……」

と見たことが無い少年と少女(?)が出てきた。

「こんにちはです、土樹、アインハルト」

「イルスイさん、この人達は？」

「ああ、2人は知りませんでしたね。男の子の方は無限学園2年の天堂恭介で、女性の方はその学園の学園長を務めている千堂由美です。たまたま出会って意気投合したので連れて来たのですよ」

「学園長だつて!？」

「ずいぶんと若いですね……」

「誉めても何も出ないよ」

由美の肩書とその若さに2人は驚くが、当の本人はおどけて答える。

「ここで、ベヒーモスの肉とかが食べられるって聞いたんだけど」

「はい、そうです」

「なあ、ベヒーモスってFFに出てくる大型モンスターのことだよな。いったいどうやって食べるんだ？」

「それは見てのお楽しみです」

疑問を抱く恭介にアインハルトは答える。

「そうだね、結構な数があったからまだ解体していない奴があるかもしれないし」

「楽しみなのです」

士樹達は期待で胸を膨らませながら城下町に入っていった。

「結構にぎやかな街だね」

「へえ、この世界はみんな獣耳と尻尾が付いているのか……おっ！」

「どうしたの、恭介？」

由美に呼ばれた恭介の視線の先にいたのは、ビスコッティ騎士団隠密部隊筆頭のユキカゼ・パネトーネだった。特徴は、金髪・巨乳・狐耳&尻尾という伝説の少女Aならば「萌え要素の集合体」と言うであろう存在である。

「おお、士樹にアインハルトでござるか」

「ユキカゼ、今日は暇なんだね」

「そつでござるよ。今日は、ダルキアン卿と一緒にバーベキューを食べに」

次の瞬間、恭介は暴走カブト並のスピードでユキカゼに抱きついていた。

「えっ!?!」

「なんだ、この子は!?! 金髪巨乳にけもの装備ってあれか!?! 男を誘っているのかあああああああ!?!?!?!」

「えっと……あの……?」

恭介のあまりの勢いにユキカゼはたじたじである。

「さあ!?! 向こうへ行つてこのメイド服に着替えてくるんだ!?!
そして、俺のことをご主人様と……」

「恭介……」

由美が某白い悪魔（Not機動兵器）の如く低く静かな声で呼ぶと、恭介の動きはピタッと止まり、油が切れた機械のように振り返った。

「ちょっと向こうへ行こうか？」

「ゆ、由美！！ た、頼むから待ってくれ！！」

由美は人目の少ないところへ恭介を引きずっていった。

くしばらくお待ちください

「皆、待たせてしまつてごめんね」

笑顔でそう言った由美の衣服には赤い液体がいくらか付着していた。

「……由美さん、血が付いていますよ」

「屋だなあ、これは血じゃないよ。恭介変態に借りてきた赤い絵の具が跳ねただけだよ」

土樹が由美の後ろを見ると、ミイラ男がいた。それが誰かは言うまでもない。

「ほれはへんたいふあふあい」（俺は変態じゃない）！！」

「さて、恭介はいつまで立っても帰ってこないし、速く目的地に行こう」

「そうですね」

由美とイルスイはミイラ男恭介をほったらかしにしてステップで進んでいった。

「動ける？」

「はんほはは（なんとかな）」

土樹達はミイラ男に配慮しながらゆっくり進んでいった。

【フィリアンノ城下町広場】

「おお、準備は進んでいますね」

広場では、多くの人たちが肉、テーブル、皿、調味料などの準備を

していた。肉を調理する際に発せられる匂いが土樹達にも届いた。

「良い匂いがするぞ」

「さすがは王城の料理人たち、腕が良いね」

ユキカゼがクンクンし、土樹が素直な意見を述べていると、恭介が土樹の肩を叩いた。

「土樹、1つ聞いていいか？」

「何？」

「本当に今日アレを食べるのか？」

そう言つて、恭介が指をさした方向にあったのは、台車で運ばれている運ばれているベヒーモスだった。

「見た目は怖いけど、けっこう美味しいよ」

「土樹はベヒーモス・イーターと呼ばれることがあるくらいにベヒーモスを食べるのが好きですからね。牛や豚よりも多く食べているような気がします」

「……どれだけ食べているんだよ」

恭介が突っ込みを入れ、アインハルトは顔を赤くしながら話を続ける。

「夜枷の時は、私の体を貪るように食べますし……」

「恥ずかしいから公の場でR18発言するのは控えてくれ!!」

「2人は相変わらず仲がいいでござるな」

「まるでおとぎ話に出てくる王子様とお姫様だね」

「俺も……フェイトさんとそういうコミュニケーションを取れる仲間になりたい」

ユキカゼは微笑ましい笑顔、由美は夢見る乙女の顔で土樹達を見ているが、恭介は悔しがっていた。

「はむはむ、確かにけっこういけますね」

4人がしゃべっている間にイルスイはベヒーモスのハンバーグを食べていた。

「そろそろ食べようか」

「そうですね」

4人はイルスイに遅れる形でそれぞれ皿を取り、肉料理を食べ始めた。

「美味しい！！　なんだ、この味は！？」

恭介はしょっぱなから重いステーキをがつついていた。

「恭介、あんまり慌てちゃだめだよ」

「そういう由美は左手に大量の串焼きを載せているじゃねえか！！」

恭介と由美はベヒーモスの肉の味が入ったようで、モリモリ食べている。

「土樹、あ〜ん」

「あ〜ん」

土樹とアインハルトは焼き肉を食べさせあいつこしていた。

「しっかし、何事も見た目だけじゃ本質はわからないな。あのベヒーモスがこんなに美味しい料理になえるんだし」

「そういうことはよくありますよ」

イルスイは漫画肉を頬張りながら恭介にしゃべりかける。

「そうだね……」

土樹はスープを飲みながら感慨にふけていた。

「あの頃の“俺”には想像も出来ないぐらいに今は幸せだね」

土樹はスープを見つめながら大樹と出会う前の自分を思い出していた。

「土樹、こっちに美味しいウインナーがありますよ」

「ピーマンの肉詰めもあるぞ」

土樹が振り向くと、手を振っているユキカゼと微笑を向けているアインハルトがいた。

「今いくよ」

土樹は故郷を思い浮かべながら今の幸せを大事にし、その足を愛する者のところへ進めた。

第13話『MS少女』

【ACE学園・科学研究ギルド】

「ジェイル先生、何の用ですか？」

ヴィヴィオと共にジェイルに呼び出されたアインハルトはジェイルに尋ねる。

「実は、君達のためにあるMSを用意してね。それがようやく完成したのだよ。ウーノ、データを出してくれ」

「はい」

ウーノが空間に表示させた2つのディスプレイにはそれぞれの機体が映し出されていた。片方が青ベースのトリコロールカラーで背中に大型ウイングを装備している機体で、もう片方は緑ベースで所々が白と黒に塗装されているスマートな感じの機体だ。

「大型ウイングの方がヴィヴィオ君用で、緑の方がストラトス君用のものだ」

「いったい何故こんな物を作ったのですか？」

「作者がみつちい氏という人が作ったMS少女シリーズに魅せられてね、使用許可を頂いてきたのだよ。ヴィヴィオ君用に用意した物が特に好みらしいよ」

「では、私の機体は？」

アインハルトがディスプレイに映し出された自分の機体を指さす。

「そっちは、前杉君がデザインと設計をしたんだよ」

恋人の名前にピクツとアインハルトは反応した。

「君の特性を活かすことと目の保養をコンセプトとしたらしい」

「アインハルトさん、さっそく着けてみようよ！！」

ジエイルの話聞いたヴィヴィオはワクワクが抑えきれないようだ。

「（土樹が私のために……）やります！！」

「では、デバイスを貸してくれ。これからMSをデバイスの中に収納しなくてはいけないからな」

「分かりました。ティオ」

「クリスマスも」

2人の姫は己のデバイスに命じ、ジェイルの元へと行かせた。

「先生、ふと思ったんですが、土樹はどこにいるんですか？」

「彼は別用で今はいないよ。作業はすぐに終わるから先に演習場の方へ行ってくれたまえ」

ジェイルからの質問の答えを確認したアインハルトはヴィヴィオと共に演習場の方へ歩いていった。

【20分後、科学研究ギルド・技術試験用地下演習場】

「2人共、準備はいいですか？」

「はい」

『では、MSを身につけてください』

「行くよ、クリスマス。セエットアップ」

「武装展開」

ヴィヴィオはMSを装着できるようにバリアジャケットのインナーだけを展開し、頭部にはツインアンテナとカメラ、両手にはガンレットが装備された。その後、胸と肩、脚部に装甲が次々と取りつけられ、最後に、可動式のウイングが装備された。

アインハルトも同様の過程を経て装甲を装着する。そのシルエットは、ウイングが無いためにスマートな印象を受ける。

変身を終えた2人の少女……否、MS少女は地面に降り立った。

「これが……」

「私達の新しい力……」

アインハルトとヴィヴィオは初めてまとうMSに感嘆の声を漏らす。

『ヴィヴィオの機体はバランスが非常に良く、各種武装による戦闘を得意としていてシールドも有ります。アインハルトの機体は装甲は薄いですが、柔軟性と機動力に優れていて、フレームもオリジナルより強化されているので思いつきり戦ってもらっても構いません』

『2人共、準備はいいかね？』

「問題ありません」

「いつでもOKだよ」

『では、始めてくれ』

ジェイルの合図で2人の美しき姫は拳を構える。明らかに武器を使う気がないので分かる。拳を構え、しばらく見つめあっていた2人は駆け出し、その拳を突きだした。拳がぶつかりあった瞬間、衝撃波が生じる。

(ヴィヴィオさん、あいかわらずまっすぐな拳を打ってくる!!)

(パワーは私の方が勝っているはずなのに……さすがはアインハルトさんだ!!)

その後、2人はいったん距離を取り、アインハルトは俊敏性を活かして、蹴りや拳をを組み合わせた小技を細かく連続で決める。

ヴィヴィオはシールドを使って攻撃をさばきながらわずかな隙を狙って攻撃を打ち込むが、アインハルトに当たることはなかった。

(こちらは機動性重視ですからうかつに踏み込めませんね。何か攻撃手段は?)

アインハルトが機体を管制しているアステイオンを通じて機体のステックを見ると脚部に隠し武装があるのが分かった。

(ビームサーベルですか。しかも、武器の扱いに慣れていない私にも扱いやすいよう膝から下を覆う形で……本当に士樹は私をよく見てくれている!!)

アインハルトはいつきに接近し、3発ほどジャブを打ち込み、脚部のビームサーベルを展開した上で左足を軸にして回し蹴りを放つ。ヴィヴィオは間一髪のところまで左手の小型シールドを使って防御する。

「今のは危なかったですよ、アインハルトさん」

「ナイトの思いに答えるのが姫の務めですから」

「戦闘中にのろけないください」

ヴィヴィオがアインハルトに素早く掌底を打ち込む。アインハルトは第六感に従って右に回避する。

「今のを初見でかわされるとは思いませんでした」

「手のひらにビーム砲とはえげつない機体ですね」

「アインハルトさんの隠しビームサーベルほどじゃありませんよ。士樹のことだから他にも武装を仕込んでいるでしょう。まだまだ安心出来ません」

ヴィヴィオはそう言いながらいったん距離を取り、周囲に魔力スフィアを多数展開する。

「でしょうね、土樹は用意周到ですから」

対するアインハルトも迎え撃つべく両手に魔力を込めた。

【地下演習場・管制室】

「2人共、なかなかやりますね」

「ああ、アスプルンド先生の枢木君ほどではないが、初めての装着で高機動型の機体を乗りこなしている」

ウーノとスカリエッティがモニターの向こうで繰り広げられる激しい戦いを見ながら言う。

「前杉君もどうだい？」

スカリエツティは椅子を回転させて後ろで座っている土樹の方に振り向く。

「いやあ、実に眼福だ。恋人のあんな姿が拝見出来たんだから。レイも悔しがっていたから後で戦闘映像をダビングして渡さないといけないね」

どごそのウサ耳カチューシャを装備した天才科学者のようなテンションで土樹は嬉しそうにうんうんと頷きながら語っていた。

「それは大丈夫です。管制と並行しながらダビングもしてありますので」

「助かります。さすがは、ウーノさん。仕事が速いですね」

土樹はウーノに感謝した後、モニターに視線を戻して観戦を続けた。

「しかし、君にもお茶目なところがあるんだね。ああいう物を設計するとは思わなかったよ」

「男が好きな人のあんな姿やこんな姿を見たいと思うのに理由はいりませんよ」

「なるほどね」

士樹と話し終えたジエイルは笑みを浮かべながらコンソールの操作に戻った。

第14話『夏と言えばやっぱり海』

幾多ある次元世界……その全てに国が存在しているわけではない。廃墟のような世界もあればモンスターで溢れかえっている世界もある。

今回、舞台となるのはリゾート地として有名な無人世界カルナージ。その海に、高等部の2・Cに所属する生徒達を始めとするACE学園の関係者が遊びに来ていた。

「良い景色だね」

右手に鞆を持った土樹が青空を見上げながら言う。その隣では、テントを設置していた土見稟がキョロキョロしていた。

「どうしたの、稟？」

「いや、辺りから親衛隊がボソソジャンプしたりしてこないかと思っただけ……」

「それなら問題ない。奴らにはセシル先生達が料理を振る舞うよう

手配した。今頃、生死の境をさまよっているだろう」

「さすがは、黒の皇子。やることがえげつない」

「御愁傷様だな」

シートを固定するための釘を打っていたルルーシュがさらっととんでもないことを言うが、レイは普通に応え、稟は苦笑いする。

「よし、これで終わりだな」

「テントももう終わりだよ。ところで、女子の着替えはあとどれくらいかかる？」

鞆に不要な荷物をなおしている土樹の質問に対し、ルルーシュは後ろを指でさした。土樹が振り返ると、電光石火のごとき速さでトロピカルなビキニのヴィヴィオがレイに抱きついた。

「ちよっ！！ 危ないだろ！！」

「だって、一刻も早くレイに水着姿を見てもらいたかったんだもん」

レイは怒るが、上目遣いで甘えてくるヴィヴィオの胸元に意識がいつてしまっているため、あまり怒気はこめられていない。

「その体勢じゃあなたの水着はよく見えないわよ」

白いワンピースに身を包んだ奏が音無と共に現れ、さりげなく指摘する。ヴィヴィオは素直に従い、レイから離れる。

「他の皆は……もう来たみたいだね」

更衣室の方から歩いてきたアインハルトはライトグリーンの水着にクリアグリーンのパレオを装着していた。その水着は、大きい胸を強調するだけでなく清楚さを感じさせていた。

「土樹、どうですか？」

「似合っているよ、アインハルト」

出来るだけ平然を装ってアインハルトは尋ねる。土樹は全身を見渡し、パレオと胸に視線を奪われながらも応える。

「もう……どこを見ているんですか？」

「ごめん、君があまりにも綺麗だから見とれていたんだよ」

土樹とアインハルト以外のペアも水着が似合っているかどうかで論議が成されているが、稟は彼女側にペースを持っていかれている。

「せっかくですし、ボートでも借りませんか？」

「いや、この際だ。アクエリアスチェイサーを使おう。あれは、水中にも対応出来ることを知っているよね」

「でも、ここにアレは……そう言えばどこにでも転移しますよね」

「そういうこと」

土樹がタクシーを呼ぶかのように右手を上げると、時空の壁を越えて愛機がやってきて、変型を開始した。タイヤが水平に倒れ、ゴムボートを連想させるパーツが装着されることにより水上・水中航行用のサブマリンモードへと変型した。

「乗って」

「はい」

土樹がバイクの前に乗り、アインハルトが土樹に抱きつく形で搭乗した。

「しっかりつかまっていますね」

「分かってますよ」

土樹はペダルを踏み、バイクは海上を走りだした。バイクの通行によって激しい水しぶきが発生し、2人に降り注ぐ。他の観光客や障害物に注意しながら海上を走行していった。

「水しぶきが気持ちいいですね」

「あ、ああ（僕の場合は、それ+背中に当たっている2つの感触が当たっているけどね）」

土樹はバイクを通り越した辺りで海岸との距離を確認するためにいったん停止する。

「バイクだとここまであっという間ですね」

「これから海の中を見ようと思うんだけど、どうする？」

「ぜひお願いします」

「了解。じゃあ、これを着けて」

土樹はアインハルトに口にくわえるタイプの小型酸素ボンベを渡し、自身も装着してバンドの長さを調整する。装着した後、土樹はバイク

クを海の中へと潜らせた。

“キレイですね”

“なんでこうも海の中は幻想的なのかな？”

“生命の海とも言いますし、普段は人がいないからじゃないでしょうか？”

“そうだね”

水中のため、土樹とアインハルトは会話で話していた。青い海の中を太陽の光が通り、たくさんの魚が泳いでいる光景は2人の心を虜にするのに十分だった。

“見てください、土樹。あつちに珊瑚がありますよ”

“本当だ。傷つけないように気をつけないと”

背中に張りついたアインハルトが指をさした方向を見て、土樹は近づきすぎないよう慎重にハンドルを操作する。海中旅行を楽しんでいると、深い溝や穴が見えた。

“あまり潜りすぎると大変だね。いったん上がるよ”

“そうですね。そろそろお昼ご飯の時間ですし海岸まで戻りましょう”

土樹は車体を上に傾け、ゆっくりと上昇してから海岸の方に戻っていった。すると、陣地として使っているエリアが慌ただしくなっていた。

「何かあったのでしょうか？」

「さあ？」

首を傾げる2人を見つけたレイが近寄ってきた。

「土樹、神王と魔王バカ2人のせいで食料の大半が駄目になった！ 今から、手分けして食料を探しに行くぞ！！」

「……何をしているんだ、あの2人？」

「ネリネさん達が確実にしばきあげているでしょうね」

今ごろ1週間メシ抜きや魔王様呼びを宣告されているであろう大人2人を思い浮かべながら土樹はもう1度アクエリアスチエイサーにまたがった。

「仕方ない、もう1回海中デートをしよう」

「未熟ながらも全力を尽くさせていただきます」

「OK」

アインハルトがレイからモリを受け取って再びバイクに搭乗したのを確認した後、土樹は本日2度目の海中旅行へと繰り出した。

第15話 『ポロリは用意出来なかったノPへの扉』

昼ごはんを食べた後、いくらか遊んだ土樹たちはルーテシアの母メガーヌ・アルピーノが経営するホテルの温泉でゆっくりしていた。

「ふう、いい湯だな」

「俺達はたいがいシャワーなんだが、こういうのもたまにはいいな」

「そう言えば、土樹は時々来てるんだよな？」

「ああ、アインハルト達がやるオフトレに付き合っ形だね」

音無とルルーシュ、稟と土樹は温泉を楽しんでいた。

「光がまぶしいよ……」

「そうだね、神ちゃん」

前回、馬鹿をやった神王と魔王はダークサイドに落ちかけている。

「2人ほど地獄兄弟になりかけているけどね」

土樹に対し稟は苦笑いで応える。

「ん、滝湯から人影が来るぞ」

もやのかかった視界の中を進んできたのは、大樹だった。

「あれっ、君達もここに来ていたんだ？」

「大樹さん、どうしてここに？」

「イクスに誘われたんだよ」

（本気で大樹さんを捕まえにくつもりなんだ。まあ、それぐらいしないと駄目か）

「以前、刹那の世界へお宝をちょうだいしにいった時も追いかけられたからね」

「後で刹那から聞きましたけど、自業自得ですよ。しかも、オーズ・ガタキリバコンボまで持ち出したみたいですし」

「やっぱりこの温泉は良いね」

「そうだね、ヴィヴィオちゃん」

一方、女湯ではヴィヴィオとシアが中心となっていた。

「若い子は元気でいいわねえ」

「亜沙ちゃん、ばば臭いですわ」

高等部3年の亜沙は年齢に似合わぬお風呂の楽しみぶりを披露している。そんな中、1人だけ憂鬱そうにしていた。

「こういう時こそ土樹と一緒に入りたかったです」

「あいかかわらず大胆だね、アインハルトは」

「うー、私も負けてられないっす」

シャーリーが、平然と恥ずかしいことを口にするアインハルトに感心するが、他のメンバーはだいたい赤面していた。

「こ、恋人どうして一緒に入浴するのが普通なんですか？」

「稟も喜ぶ……?」

イクスは赤面しながら、銀髪ロリのプリムラは疑問を口に出した。

「私が結弦と一緒に入ろうとすると、顔を赤くして顔を背けることが多いけど嫌なのかな？」

「嬉しいとは思いますが、基本的に男女は別々に入浴しますよ」

奏の問いに対してネリネは汗を流しながら発言した。

入浴後、稟と音無は一緒に食堂まで歩いていった。

「気持ちよかったな」

「ああ」

「おい、ヴィヴィオ達からトランプをしないかって誘いを受けてるんだが、お前らはどうする？」

「夕食にはまだ時間があるだろうし、それもいいな」

音無と稟はレイからの誘いを受け、テーブルに近づいていった。

「？ 土樹は一緒じゃないんですか？」

「先に来ていなかったのか？」

「珍しいな、土樹がアインハルトといないなんて……」

「土樹なら外だよ」

浴衣を着ているアインハルトと男子2名の疑問に対して大樹は親指で窓の外……ホテル裏側の森をさす。土樹はそこで空を見上げながら歩いていった。

「散歩をしていたんですね」

「土樹、ここに来るとけっこうあの辺りを歩いていることが多いね」

「みんなー！ ご飯が出来たわよー！！」

ホテルの主であるメガーヌがキッチンから呼びかける。その声が聞こえたのか土樹が慌てて時計を見る。

「馬鹿な！？ 予定時刻より30分も早いぞー！！」

イレギュラーに弱いことで有名なルルーシュ・ランペルージも予想外の事態に慌てていた。

「今回は、事前の仕込みがほとんどだったから早く準備できたのよ」「そういうことですか」

「匂いからすると、スペアリブで味付けにんにくを使っていますね」

ルルーシュはそれを聞いて納得し、亜沙は匂いから料理の内容を推測する。

「本当だね。いい匂いが漂ってきたよ」

「土樹が喜びますね、割とニンニクは好きですし」

シアが子供っぽく匂いをかぎ、アインハルトも嬉しそうにする。

「じゃあ、土樹が戻ってきたら食べられるようにしようか」

ルーテシアはそう言って手のひらでパンパンと音を立てて一同を取りまとめた。

夕食後、土樹は再び森を散歩しながら月を見上げていた。途中、足音がしたので歩みを止めた。

「そこにいるのは誰かな？」

その声に反応してアインハルトが出てきた。

「ここで何をしていたんですか？」

「ちよつと故郷のことを思い出していただけさ。雰囲気似ていたからね」

後をつけていたことを責めもせず土樹はアインハルトの質問に答える。

「そう言えば、あなたは地球で生まれ育ったわけではありませんでしたね。あなたの過去について聞いていいですか？」

A C E 学園は、非常に多くの世界から人間が集まる。その中には、複雑な事情を持つ者も少なくない。故に、事件が絡んだり、よほど心を許している人物でない限り他人の過去はあまり詮索しないという不文律があった。

「ま、僕だけアインハルトの過去を知っているのは不公平だし、話すよ」

土樹はアインハルトに振り返って話を始めた。

「“俺”の国ベールセルは緑豊かで、農業が盛んだった。だが、支配階級の貴族が腐っていた。奴らは自らの利益しか考えず、農民から搾取を繰り返していた」

「誰もそれを止めようとしなかったんですか？」

「国王でさえ法律に縛られてろくに是正出来ないんだ。貴族の横暴を止められる人間なんていないさ」

土樹は呆れや悲しみと言ったマイナスの表情を浮かべながら話を続けた。

「“俺”の父親である領主もそんなクズの1人だった。農民のことは何も考えず、自分の都合でしか物事を考えられない男だった。奴は息子である“俺”にさえろくに自由を与えようとはせず、自らの

傲慢のためにただ教育するだけだった。そんな生活を続けていた“俺”からは感情が少しずつ無くなっていった」

士樹は呼吸をして話を進めた。

「ある日、火事が起こった。“俺”は瓦礫に挟まれ、動けなくなつた。それを助けてくれたのが……」

「アクエリアスドライバーを探しに来た大樹さんだつたんですね」

士樹は頷いた。

「僕はあの人の瞳に引き寄せられ、1か月ぐらい一緒にした後地球のACE学園に来てその可能性を目の当たりにしたんだ。そこから先は君も知つてのとおりだ」

「そうだったんですか……」

2人の間にしばしの沈黙が流れた。しばらく思案した後、アインハルトが口を開いた。

「この後、もう1回一緒に温泉にはいきませんか？」

「それは魅力的は誘いだね。だけどその前に……居るのは分かつてるんだ。出てきてよ」

土樹が少し離れたところにある木々にアクエリアスドライバーを向けながら問いかけるとレイとヴィヴィオ、亜沙が出てきた。

「俺とヴィヴィオはちょっと夜風に当たりに来たただだ。話はほとんど聞き取れなかったら安心していいぜ」

「テへへ、気になったので後をつけてみました」

「まったくもう」

土樹はアクエリアスドライバーをいじりながら答えた。

「念のために亜沙先輩の記憶を消去」

「誰にも言わないからそうするのは止めて!!」

土樹があまりにも自然な動作だったので亜沙は慌てて止める。ちなみに、亜沙もそれほど話を聞いてはいない。土樹は亜沙にいぶかしむような視線を向けるが、作業を中止した。

「これから気をつけてくださいよ」

土樹はそう言って密かに笑みを浮かべながらホテルに戻っていった。
アインハルトも少し遅れて着いていく。

ACE学園小説連載1周年記念話その1『学園祭〜かいせん〜』

10月、ACE学園では幼稚園〜大学を含んだ全校規模での学園祭が行われる。

午前10時から一般公開が始まり、いつも以上にフリーダムで様々な年代の人達がそれぞれの学舎に集まっていた。

「よお、前杉じゃないか」

校舎前の屋台エリアをうろついている土樹に焼き鳥（たれと塩が二本ずつ）を持った高等部2年の相川歩が挨拶した。

「歩か。他の人達は一緒じゃないのか？」

土樹もチャーハンを食べる手を休めて挨拶に応じる。

「今日は、ユーと学園祭を見て回る約束なんだ。お前こそお姫様はどうしたんだ？」

「アインハルトは水泳部カフェの助っ人でスク水メイドをやっているよ。ちようどいいから一緒に行かないか？」

「別にいいぞ。ユーともその辺りで合流する予定だしな」

2人がプールへと歩みを進めようとした時、急に全校放送が流れた。

『皆さん、おはようございます。イベント企画委員会会長のミレイ・アッシュフォードです。これからキューピッドの日を始めます。まずは、事前に配られている帽子を被ってください』

「ああ、例の鬼ごっこイベントか」

「会長も人が悪いよね。彼氏・彼女持ちまで巻き込むんだからさ」

2人は軽口を叩きながら鞆からハート型の帽子を取り出して被る。

『ルールは簡単。男子は青いハート型帽子を被り、女子は赤いハート型帽子を被ります。そして、意中の異性の帽子を奪い、自分が被れば強制的にカップル成立です』

「トモノリに見つからない内にさっさとユーと合流するか」

「そうだね。アインハルトも未だに親衛隊が残っているし、用心に越したことはないね」

土樹は目的地であるプールへ行くため、複数の逃走手段を準備する。

『では、スタートの前に私から一言』

ミレイは息を一拍おいて息を吸い、爆弾を投下した。

『手配書にリストアップされている人物の帽子を私に届けてくれた人には1人あたり100万円相当のプレゼントをします』

「手配書？ 鉄腕DASHの100人警察でもやるつもりなのかな？ ま、最優先はアインハルト……」

土樹が横を見ると端末を見ていた歩の体がゾンビなのにガクガクと震えていた。

「どっしたの？」

「こっ、これを見る……！」

土樹が歩に差し出され、覗き込んだ端末には、

「手配書」

ルルーシュ・ランペルージ

音無結弦

土見稟

相川歩

風凧レイ

前杉士樹

e t c ……

と表示された。気がつけば、2人の周りにいる生徒は怪人態になっていた。いたり、ナイトメアを装着していたり、デバイスを展開したりしていた。既にミッドチルダ式の結界が展開されているため、本気で暴れても問題はない。が、四面楚歌であることに変わりはない。

「どうする、前杉？」

「まずは、図書館に逃げ込む。あそこなら少しはマシだと思う」

『では、カウントダウンを始めます。5・4・3・2・1・0！！』

カウントダウンが終わった瞬間、ミサイルや砲弾、魔力弾の雨が土樹と歩のいる場所を襲った。明らかにオーバーキルな攻撃が終わった後、硝煙がたちこめ、視界が塞がれた。

「やったか！？」

「待て！！ まだ奴らの戦闘不能が確認できたわけじゃない」

攻撃に参加したサザランの1人にそう言い、ウオードがたしなめる。煙が晴れていったが、そこに2人の姿はなかった。

「いない!？」

「馬鹿な!! よく探せ!!」

多数の生徒が爆心地に接近し、近代ベルカ式の騎士が兎の頭の様な物を発見した。

「これは何だ？」

騎士が兎を持ち上げると、兎はカチツと音が鳴り、大爆発を起こした。それを、アクエリアスと歩はミラーワールドの中から見ていた。

「流体サクラダイトを混ぜたメテオールだ。こつも簡単に決まると笑いが止まらないね」

「えげつねえな」

アクエリアスはクスクスと笑っている。仮面の下では、もっと笑っていることだろう。

「それより速く行こうぜ。俺はあまりここにはいられないんだ」

「待て!!」

2人の行く手を遮るようには、佐野満が変身する仮面ライダーインペ
ーが現れた。後ろには、契約しているゼール系のモンスターがうじ
やうじやいた。

「お前達の帽子は俺達がもらうぜ！！ おとなしく観念しろ！！」

勝利を確信したインペラーが2人を指差しながらポーズを決める。

「くっ、どっするっ？」

「っっする」

アクエリアスが右手を上げると、アクエリアスチエイサーがインペ
ラー達の後ろから現れ、全弾を一斉発射した。

「えっ
」

「更にもう1発」

《FINAL ATTACK RIDE:Z・Z・Z・ZOLDA》

アクエリアスは目の前に牛型モンスターのマグナギガを呼び出し、
その背中にアクエリアスドライバーを差し込んで引き金を引き、エ

ンドオブワールドを発動した。

「逝ってらっしゃい」

マグナギガの正面からも倍以上の砲弾を放たれ、インペラー達は全滅した。

「う………まだまだ………」

まだかすかに指が動くインペラーに歩か近づいてその帽子を奪い……、

「ほいっと」

その辺に倒れていたゼールの頭に被せた。アクエリアスは無言でグツジヨブと右手の親指を立てて語り、歩も同じ行動をすることで返答した。

（そんな、馬鹿な………）

「ちようどいいからこれも貰っていくか」

絶望しきったインペラーを尻目に歩は近くに停めてあったライドシユーターに搭乗した。

「よし！ こいつならミラーワールドとの行き来も出来るな！！」

「そろそろ行くよ！ 他のライダーに見つかるのも時間の問題だろ
うし」

「了解した」

アクエリアスと歩はバイクを操縦し、その場を離れた。

土樹達がインペラーを撃退したのと同時刻、ACE学園高等部・屋上は炎に包まれていた。たくさんの暁の残骸とそのパイロット達が倒れている状況で赤い翼を生やした悪魔は最後の一機に尋問していた。

「言え！ ゼロは……ルルーシュは何処に行った！！！？」

「知らねえよ、バアカ」

「ちっ！」

悪魔は尋問を終えた後、暁を放り投げた。

「待っている、ルルーシュ!! 必ず見つけ出してやるからな!!」

悪魔……紅蓮聖天八極式の紅月カレンは羽根を広げて叫んだ。

ACE学園小説連載1周年記念話その2『戦乱〜とろろつちゅ〜』(前書き)

読者の皆様、すみません。

戦闘シーンが予想以上に手こずってしまい、更新が遅くなっていました。

ですが、その分気合を込めて執筆しました。

ACE学園小説連載1周年記念話その2『戦乱〜とろろつちゅ〜』

【ACE学園高等部・グラウンド】

「はあっ!」

MS少女化したアインハルトが脚部ビームサーベルの回し蹴りでライオトルーパーの頭部に直撃させ、昏倒させる。正面からはさらに治安維持担当のゼクトルーパー部隊が出てきた。完全に職務を遂行する気はない。

「次から次へと……キリがないよ!」

DESTINYニーヴィヴィオは背中ofビーム砲でオルフェノクを1人撃墜する。その後、地上に降りてアインハルトと背中合わせになる。

「土樹は大丈夫でしょうか?」

アインハルトが不安そうに漏らす。そんなアインハルトにヴィヴィオが明るく話しかける。

「大丈夫ですって、アインハルトさん。通りすがりの怪盗の弟子で

あり戦姫の騎士でもあるあの人がアインハルトさんを置いて逝くわけがないじゃないですか」

ヴィヴィオが朗らかに言うと、アインハルトが微かに笑う。

「確かにそうですね。いざという時は平気でえげつない行動を取りますし」

「私もレイのことが心配ですけど、その前に自分の身を守らないといけませんし」

ヴィヴィオがサムズアップしながら答える。

「確かにその通りですね。まずは、ここを突破しましょう」

アインハルトは決意を胸に空を見上げた。

(土樹、無事でいてください)

アクエリアスと歩はミラーワールドを抜けた後、ライドシューター（持ち主は佐野満）を爆破して囷に使い、図書館に無事潜り込んでいた。

「ひとまず一件落着だな」

歩は危機的状況を一時的に切り抜け、ホッと一安心する。

「歩」

アクエリアスはアサルトライフルに、ハンドガン、手榴弾などの武器を歩に手渡す。

「さっきくすねた物だ。今は、手ぶらでうるつくのは危険すぎるからね」

「サンキュー」

バイオハザードに巻き込まれたも同然な状況のため、アクエリアスは警戒を促す。

「それにしても静かだな。外はあんなに騒がしいのに」

「とはいえ安全性が確保されたわけじゃない。少しは動いた方がいい」

歩が頷くのを確認し、アクエリアスは銃を構えながら辺りを探索する。このお祭り騒ぎの中、普段いる司書の姿すら確認できない。その沈黙が、現状がいかに普通じゃないかを語っていた。一歩一歩静かに歩いていると、人影が本棚の影になっているのが見えた。いったん動きを止め、歩に目で語りかけ、戦闘準備をさせる。

「そこに誰がいるの？」

「その声は士樹か」

アクエリアスが銃口を向けながら聞くと、壁にもたれ掛かっているルルーシュとその看病をしていると思われる音無がいた。

「どうしたんだ、ルルーシュ！？ 怪我してるじゃないか！..」

「カレンにやられた.....くっ.....」

「ニブチンとはいえルルーシュがここまでやられるってことは.....
聖天八極式を持ち出しているのか!？」

アクエリアスの頭に最悪に近い事態の1つがよぎる。

「そうだ。お前達が屋台エリアで起こした爆発と盾になってくれた
暁隊のおかげでなんとか逃げられた」

「ルルーシュ……」

悲しそうに呟く音無の側でルルーシュは痛みとは別の要因で悲痛な表情をする。カレンは黒の騎士団で最強のパイロットだ。量産機程度では見るも無惨な状態になるのは容易に想像できる。だが、彼らに悲しむ時間は無かった。

「ッ、みんな伏せる!!」

歩の叫びと共に咄嗟に本棚の影に隠れると同時に窓ガラスの大半が割れ、赤い悪魔とごつい顔の騎士が入ってきた。

「本当にルルーシュがここにいいのか？」

「ええ、そのはずよ」

（あれは、カレンの紅蓮に……ジノのトリスタン・ディバイダー！
！）

（嘘だろ……！ ナイト・オブ・スリーまで敵に回るのか!!）

「とどろでさ、気づいてるんなら答えてくれてもいいんじゃないかな？」

「何のこと？」

カレン達の会話を盗み聞きしようとアクエリアス達は意識を集中させる。

「本棚の後ろに隠れている4人組さん！！」

トリスタンはそう言いながらスラッシュハーケンを4人のいる方へと放ってきた。

「ちいっ！」

《KAMEN RIDE: AGITO・FLAME KUUGA・
PEGASUS PSYGA》

アクエリアスは高い機動力を持つ2機に対抗すべく察知能力に長けたアギト・フレイムとクウガ・ペガサス、空戦能力を持つサイガを召喚する。

「俺達も応戦するぞ！！」

「ああ！」

音無はハンドガン、歩はアサルトライフルをトリスタンに向けて連射する。

「あゝら、よっと」

トリスタンは軽やかな動きで襲いかかってくる弾丸を次々とかわしていく。

「音無！！ 歩！！」

「あなたの相手はこっちよ！！」

紅蓮がfrisbee状の放射波動砲をアクエリアスに向けて投げた。アクエリアスはなんとか左によけるが、後ろにあった本棚は真つ二つに割れてしまった。その隙を突いてアギトFが斬りかかり、クウガPが狙撃する。

「その程度でっ！！」

紅蓮はエナジーウイングを盾代わりにして狙撃を防ぎ、斬りかかっ

てきたアギトFの頭をつかみ、放射波動砲を照射して消滅させる。

(クウガPの狙撃に反応するだど!?)

アクエリアスは驚きながらも次のカードをドライバーに装填する。

《KAMEN RIDER:RIO TROOPER》

アクエリアスは5体のライオトルーパーを新たに召喚し、サイガと共に牽制させ、自身もアクエリアスドライバーをMモードにして連射する。

「ほらほら、どうした？ まるでかすりもしていないぞ」

「クソッ！ こんなことならミストルティンをハルナから借りておくんだっただよ」

歩はアサルトライフルを撃ちながら愚痴をこぼす。

「駄目だな。動きに無駄が多すぎる」

トリスタンは右腕のブーストハーケンを歩の腹部に向けて放つ。ゾンビとはいえ基本的に一般人である歩にはかわせず、腹パンは見事に決まって壁まで叩きつけられた。

「がはっ!」

歩は口から唾を吐き出し、腕をだらりと下げる。追撃をするべく歩に接近する途中、一本のワイヤーを切ってしまった。その瞬間、無数の鉄球がトリスタンに襲いかかり、爆煙が発生した。

「やったか!」

一時的に離れていた音無が現場に現れて状況を確認する。

「さすがにナイトメアとはいえクレイモアの直撃を食らったらまとも立ってない」

「残念でした」

台詞と共にワイヤーが音無に襲いかかり、感じがらめにする。その上空には所々煤けているトリスタンがいた。

「相川を囷にしてクレイモアを食らわせる作戦か。なかなかよかったが、それだけじゃこの俺は倒せない」

「くそッ！！ 離せ！！」

音無がじたばたするが、ワイヤーはびくともしない。

(どうする？ ルルーシユには元々単独でラウンズクラスと戦うような戦闘力はないし、紅蓮との戦闘で負傷しているから当てには出れない。土樹もこの広さじゃよくて紅蓮を遠ざけるのが精一杯だ。いったいどうやったら奴に勝てる？)

歩がトリスタンを睨みながら頭の中で打開策を考えようとすが、すればするほど絶望に包まれていった。

「さて、次はお前を確保するか」

「歩、逃げるッ！！」

トリスタンはスラッシュハーケンを歩に向ける。その時、全校放送の始まりを示すチャイムが鳴り響いた。

「ターゲットの1人、ルルーシュ・ランペルージはシャーリー・フエネットと結ばれました。これ以降、2人は結界の外に弾き出されます」

「何だつて!？」

「ほお、いつの間に入ってきたんだ？」

紅蓮はこの場にいないはずのシャーリーに驚愕し、トリスタンはあくまで楽しそうにしている。その2人に光の雨が降りかかった。2人は攻撃を回避すべく散開する。トリスタンは奇襲により音無を落としてしまった。

「うわッ!！」

「音無!！」

落とされた音無は歩がダイビングキャッチでなんとか受け止めた。刹那、紅蓮に6枚の翼を生やした白騎士が2本のMVSで強襲をかけた。

「スザク……!! なぜこんなところに!？」

「友達を助けるのに理由なんていらない!！」

「お前だってターゲットの1人だろうに!！」

「そんなの関係ない!!」

白騎士……ランスロット・アルビオンに搭乗したスザクは苛烈な攻撃で紅蓮を追い立てていく。

「スザク……」

紅蓮によって負傷し、強制的に変身解除させられていた土樹がランスロットに声をかける。

「ここは、俺”が引き受ける!! 君達はルルーシュを連れて逃げてくれ!!」

「……分かった」

ランスロットの強い意志を感じ取った土樹は歩達に近寄った。

「……撤退するよ、2人とも。この状況では、僕達はただの足手まといだ」

「そうみたいだな」

「クソッ! 俺達があまりにも不甲斐ないばかり『大丈夫』ユ―

？」

シャーリー共々どうやって入ってきたのか長い銀髪に青い瞳を持ち、プレートアーマーを装着している美少女ユークリウッド・ヘルサイズが目の前にいた。

「スザクは絶対に勝つよ。だから、心配しないで」

「いったい何を根拠に……？」

「すぐに分かるよ」

士樹がランスロット達の方を指さす。さすがに2対1なため、スザクが押されている。

「これで止めだ!!」

紅蓮がランスロットに止めを刺そうと大きく腕を振りかぶりながら接近するが、急にバチバチを音を立て機能を停止した。

「くッ！ こんな時に整備不良か？」

「俺もだ。なんでこんな時に……」

紅蓮とトリスタンは機能を停止し、歩くことさえままならなくなつた。

「なっ？」

「反則過ぎるだろ、これ……」

魑魅魍魎が集まるACE学園の中でもあまりにも度を越えたチートに音無は啞然とする。敵ナイトメアの機能停止を確認した歩は真剣な表情でユークリウッドにゆっくりと歩み寄る。

「ユー」

歩の真剣な眼を見てその思いが分かったユークリウッドは自分の頭に乗っている帽子を差し出す。歩はそれを受け取り、自らの頭の上にかぶせた。

『ターゲットの1人、相川歩はユークリウッド・ヘルサイズと結ばれました。これ以降、2人は結界の外に弾き出されます』

『

アナウンスが流れた後、2人の姿はまるで最初から存在していなかったかのように消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3844o/>

ACE（アナザー・センチュリーズ・エピソード）学園

2011年11月16日13時53分発行